いわき市　保幼小連携プログラム

いわき市

大浦小学校と四倉第二幼稚園

「どきどきするなぁ
どのお兄ちゃん達と
組むのかなぁ」

「小学校のお姉ちゃんって
いろんなこと
知っているんだなぁ～」

「お兄ちゃん、
ありがとー！！」

「手伝ってあげるね
もう少しで完成だよ
がんばれー」

の交流活動　～ たのしい　あき　いっぱい ～

「ここは、こうすると
うまくいくよ！
見ててね」

「わぁ！お兄ちゃんっ
て、すごいなぁー」

「なにが当たったかな～？
みてあげるね！」

はじめに

1990 年代より保育所・幼稚園・小学校が行ってきた交流や連携の取り組みは、2000 年代以降、日本各地で広がりを見せ、いわき市においても多くの貴重な教育・保育実践が蓄積されてまいりました。保育者・教師をはじめ教育関係者は、幼児・児童の発達の特質や、遊びの意義を理解していくことが重要だと考え、合同研修を行い、幼児・児童との交流活動を活発に組織し、保幼小連携の取り組みを進めてまいりました。

これらは、入学したばかりの児童の示す行動が、保育者・教師たちに、発達と学びを連続して捉える必要性を迫ったことが発端だったと思われます。しかし、そもそも幼児は、小学校入学に向けて環境の大幅な変化に不安と緊張を持ちながら、新しい先生や友だちと出会い、初めての体験や学習活動に対して期待しつつ就学していきます。そうした子どもたちの就学時の「期待」や「希望」を、「混乱」や「トラブル」の泥沼に沈めないようにするためには、まず、保育者・教師自身が連携し合い、幼児教育と小学校教育との内容・方法の違いを理解しつつ、彼らの「不安感」を「安心感」に変え、発達と学びを円滑につなげていくことが重要です。この当たり前の事実を再認識させてくれたのが保幼小連携の取り組みであったのです。

一方、世界の学力概念に大きな影響を与えたのは、OECD が DeSeCo（Definition and Selection of Competencies：コンピテンシーの定義と選択）プロジェクトで提唱した「キー・コンピテンシー」でした。これは「単なる知識や技能だけではなく，技能や態度を含む様々な心理的・社会的なリソースを活用して，特定の文脈の中で複雑な要求（課題）に対応することができる力であるコンピテンシー（能力）」の中で、特に三つの性質*[1]を持つとして選択されたものと言われています。この「キー・コンピテンシー」の枠組みの中心にあるのは、「個人が深く考え行動することの必要性」です。地球規模の課題に立ち向かうためには、それを自分のこととして捉え解決しようとする人間の育成がどうしても必要です。これからの子どもには、知識や技能を持っているということだけではなく、それらの知識や技能を総動員して活用し、考え、目の前の課題に対応していく力を育てていくことが重要だという一致点が世界で共有され始めているのです。実際、諸外国の教育改革の中では、「基礎的リテラシー」や「認知スキル」だけでなく、「自立的活動力」「異質な集団での交流力」である「社会スキル」（いわゆる非認知能力）が重視され始めています*[2]。

こうした情勢を背景に、日本では、2006（平成 18）年には、文部科学省の施策である「幼児教育振興アクションプログラム」において「発達や学びの連続性を踏まえた幼児教育の充実」が取り上げられ、2010（平成 22）年には「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について」（文部科学省）が打ち出されました。

さらに、2017（平成 29）年 3 月 31 日には、新しい小学校学習指導要領が公示さ

れ、時を同じくして保育所保育指針、幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領がともに改定・告示されました。後者３法令が同時に改訂（改定）されたのは史上初めてのことであり、これにより、３施設とも、日本の就学前の幼児教育施設として位置づけられることになりました。そして、学習指導要領では、児童に育みたい「資質・能力」として「知識及び技能の習得」,「思考力，判断力，表現力等の育成」,「学びに向かう力，人間性等の涵養」が偏りなく実現されることが求められ、幼児期においても、遊びや生活を通した総合的な指導の中で、その基礎が培われるべきことが明記されました。

こうした中、近年、前述のように「社会スキル」、つまり「やりぬく力」や「意欲」、「自制心」という「非認知能力」が注目され、その向上に効果を及ぼす幼児教育の充実に期待が集まっています（Heckman,2013=2015）*[3]。「学びに向かう力」や「考える力」の土台は、乳幼児期の保育・教育の中で築かれると考えられているからです。

「学びに向かう力」とは、「心情、意欲、態度が育つなかで、よりよい生活を営もうとする力」であり、幼児期においては、知的好奇心や自己信頼感、集中力や持続力、自己抑制や自制心、他者への思いやりや共感性など、これからの時代を生き抜く子どもたちに求められる力であり、就学後の学びや生活を支える力です。こうした力の方向性は、今回の「保育所保育指針」や「幼稚園教育要領」等で示された「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」にも通じるものです。また、こうした育ちがみられるような教育の在り方を、保幼小の教師・保育者が一緒に考えていくことが重要なのです。

ところで、いわき市では、2017（平成 29）年 12 月に設置された「いわき市保幼小連携協議会」において、市内の保育所、幼稚園、認定こども園、小学校を対象にアンケート調査を行い、幼児・児童に育てたい力や大切にしていること、保育・教育活動における指導の重点やポイントについて「保幼小連携コアカリキュラム」（平成 30 年）にまとめました。このカリキュラムは、5 歳児から小学校 1 年生 1 学期までの幼児教育と小学校教育の「接続期」における幼児・児童の姿と保育・教育のポイントを丁寧に抑えただけでなく、保育者・教師が、その接続期に何をしなければならないのかをより具体的に項目を挙げて示しており、それが、いわき市内の保育者・教師の実践そのものから導き出されているという点からしても、注目に値するものとなっています。

「接続期」の子どもたちの「学び」はまだまだ自覚的ではありません。たとえば、芋ほりの翌日に、教師が意気込んで「今日は芋をテーマにした描画活動をしよう」と材料を準備しても、「やりたくないもん」と幼児に一蹴されてしまう可能性もあるでしょう。幼児の気持ちの流れに沿わないで強引に推し進める保育は、「押しつけ保育」になってしまいます。保育者がその子にとって必要な経験をどの子にも保障していきたいと考える時には、やってみたくなるような環境や教材を工夫し、そのための時間と空間をたっぷりと用意して、子どもたちの心の動きに寄り添っていくことが必要なのです。幼児教育では、幼児が興味を持ったこと自体を認め、その興味に保育者が付き合っていくことが重要であり、これは接続期全体に通じる関わり方です。小学校入門期の場合でも、興味を引き出す

環境を用意したり、リズムとアクセントのある発問の仕方を工夫したり、弾力的な時間割編成を行ったりすることが必要であることが、保幼小連携教育の蓄積の中で、わかってきています。幼児教育の方法論にも学びながら、幼児期の遊びの中にあった沢山の幼児の「学びの芽生え」を、いかに就学後に引き継いでいくかが、問われているのです。

最後に、今回まとめられた「保幼小連携実践事例集」について少し補足をいたします。

これらの事例は、現場の保育士・幼稚園教諭・小学校教師が、実践に活用できる事例として、市内の教師・保育者が具体例を出し合いまとめられたものですが、実践に適した時期や具体的な指導方法、コアカリキュラムとの関連は、状況によって様々な場合が考えられるのではないかと考えられます。

たとえば、保育所・幼稚園・こども園の『「夏祭り」に向けて話し合いをしよう』という実践事例では、コアカリキュラムとの関連は、【生活】と【人とのかかわり】のみになっていますが、「友だちと一緒に遊びや活動を行う中で、考えたり、工夫したりして楽しさを共有し、友だちの良さに気付いたり、認め合ったりする」という【関係性】の学びや、「自分なりに疑問に思ったことを調べたり、工夫したりしながら取り組む」という【自己】の育ちがあるかもしれません。また、「夏祭り」ですから１学期後半の取り組みとなりますが、秋祭りの取り組みとする場合は、協同的活動を通して学び合い、【自立・自律】を促す機会となることでしょう。

また、小学校の実践事例も、生活科を中心とした＜合科的・関連的な指導＞の工夫によって、より一層児童の主体性や意欲を引き出すことができる取り組みになります。たとえば、『どきどきわくわく１年生』は、自由に動き回りながら友だちと自己紹介を交互に行う取り組みですが、困っている友だちに気付いたり、その友だちに声をかけたり、楽しさを共感し合ったりといった、学びがあるかもしれません。また、国語科の「よろしくね」という単元や図画工作科の「すきなものいろいろ」という単元と関連させて、より効果的なねらいの実現を図ることも可能でしょう。もちろん、合科的・関連的な指導の工夫を行う際には，学習指導要領で各教科等の目標や内容を確認し，より効果的に展開できるように実施時期や指導方法を調整するなどの工夫も求められます。このような指導の実際については、国立教育政策研究所発行の『発達や学びをつなぐスタートカリキュラムースタートカリキュラム導入・実践の手引きー』に詳しく説明されています*[4]。

ところで、2020 年は、２月から徐々に日本でもコロナウイルス感染が広がり始め、２月 27 日に首相が全国一斉の臨時休校を要請、４月７日には７都道府県に緊急事態宣言が発出されて、保育所・幼稚園・小学校等では、感染拡大防止の観点から、多くの「自粛」や「制限」が必要となり、現場独自の「工夫」が迫られた年でした。幼児と児童の交流だけでなく、園内・校内の取り組みについても、十分な感染防止対策を講じる必要があったでしょう。首都圏では、年度の前半、公園で遊ぶ小３児童や園外散歩をする幼児と保育者に罵声を浴びせる大人もいました。しかし、年度後半に入り、手洗いやマスクなどのコロナウイルスへの対策の有効性が徐々に確かめられ、一方、幼児・児童・生徒の精神的なケ

アが必要となっていく中で、幼児・児童の豊かな育ちに必要な取り組みは、感染防止対策を行うことを前提としても、やはりどうしても必要不可欠なのだと、保育者や教師が気づかされていった年でもありました。

これまで蓄積してきた保幼小連携の実践は私たちに多くのことを教えてくれました。その学びのひとつは、就学前の保育者・教師にとっては「幼児が今持っている力や遊びの中の学びが小学校での学びにきちんと繋がっていくのだと自信を持つこと」、そして、小学校の教師にとっては、「自分の興味にとことん遊び込んだ幼児は、小学生になって、その力を学ぶ力に変えていくことができるのだと自信をもつこと」だと言えます。いわき市の保育者・教師自身による接続期カリキュラムの作成はまだ発展途上ですが、まずは、子どもたちが自己信頼感や自己肯定感を持って就学し、安心して学校生活のスタートをきることが重要です。この「保幼小連携プログラム」が、いわき市の保幼小連携の発展に貢献し、幼児・児童の主体性を育み豊かな育ちを促す一助となれば幸いです。

＊１　文部科学省「用語解説：キー・コンピテンシー」
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/031/toushin/attach/1397267.htm
三つの性質とは、①人生の成功や社会の発展にとって有益であること、②さまざまな文脈の中でも重要な要求（課題）に対応するために必要であること、③特定の専門家ではなくすべての個人にとって重要ということ。
＊２　国立教育政策研究所（2013）育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会（第６回）平成２５年６月２７日配付資料
＊３　Heckman,J.J.（2013=2015）古草秀子（訳）大竹文雄解説『幼児教育の経済学』東洋経済新報社 pp.109-124
＊４　文部科学省国立教育政策研究所教育課程研究センター編著（2018）『発達や学びをつなぐスタートカリキュラムースタートカリキュラム導入・実践の手引きー』

令和３年３月

いわき市保幼小連携協議会会長
齋藤　政子（明星大学教授）

目次

＜ いわき市の保幼小連携について ＞ 1

1　いわき市保幼小連携プログラムについて 2

⑴　策定の背景 2

⑵　策定の目的 2

⑶　目指す方向性 3

⑷　プログラムの活用方法 4

⑸　プログラムの策定体制について 5

＜ いわき市保幼小連携コアカリキュラムについて ＞ 7

2　コアカリキュラムについて 8

⑴ 就学前（５歳児）から小学校入門期（小学校１年生１学期）に至る接続の姿 8

⑵ 教師・保育者の姿勢 8

＜ 保幼小連携実践事例集 ＞ 11

3　保幼小連携実践事例 12

⑴　保育所・こども園・幼稚園の実践事例 15

⑵　小学校の実践事例 29

⑶　教師・保育者同士のつながり 43

＜ 参考　資料 ＞ 47

1　これまでの検討経過について 48

2　保幼小連携に係る調査結果について 53

＜ いわき市の保幼小連携について ＞

Ⅰ いわき市保幼小連携プログラムについて

(1) 策定の背景

少子化、核家族化、地域社会の変容等、子ども達を取り巻く環境が大きく変化する中で、小学校に入学した子どもが保育所等から小学校への生活の変化にうまく適応できないといった状況、いわゆる「小1プロブレム」が全国的な課題となっています。

こうした課題に対応するため、国においても、保育所・幼稚園等と小学校の連携を図ることが重要であるとされ、平成29年3月に告示された保育所保育指針、幼稚園教育要領、小学校学習指導要領等では、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を保育所・幼稚園等と小学校の教員が共有しながら、教育課程の編成にあたり工夫や配慮を行うことが明記されました。

これまで、本市では、保幼小連携の取組みとしては、小学校教諭が保育所で実習を行う「一日保育実習」や「いわきっ子入学支援システム」を活用した情報交換等を実施してきましたが、より深い保育所・幼稚園等と小学校の連携を図り、相互理解と協働による保幼小連携に向けた取組みとして、基本的な考え方や目指す子どもの姿、保育・教育活動における指導の重点ポイントをまとめた「いわき市保幼小連携プログラム」を策定するため、平成29年12月に「いわき市保幼小連携協議会」を設置することとなりました。

幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿

健康な心と体	自立心	協同性	道徳性・規範意識の芽生え	社会生活との関わり
思考力の芽生え	自然との関わり・生命尊重	数量・図形、文字等への関心・感覚	言葉による伝え合い	豊かな感性と表現

(2) 策定の目的

小1プロブレムのような課題が発生する一因としては、保育所や幼稚園等における「遊びや生活の中の学び」が、小学校では「学習時間で区切られた各教科の学習」となる、生活・学習環境の変化が考えられています。

一方で、子ども一人ひとりの育ちと学びは、就学前と小学校とではっきりと分かれるものではなく、つながっているため、幼児期の保育・教育と小学校教育においては、その連続性・一貫性を確保することが必要です。

このため、本市においては、幼児期の保育・教育と小学校教育の違いを踏まえた上で、その連続性・一貫性を確保する重要性について、保育士・幼稚園教諭、小学校教諭間で共通理解を図りながら、保育所や幼稚園等での経験を小学校の学習に円滑につなげて、保育・教育の質の向上を図ることで、小1プロブレムを解消するとともに、更にはその後の人生をより良く生きていくことができる子どもを育成することを目的として、本プログラムを策定しました。

⑶ 目指す方向性

本プログラムは、小１プロブレムの解消を進めるとともに、学力ばかりでなく、大人になった時に必要となる資質、特に幼児期から児童期を通して、「非認知能力」（自尊心や自己制御、忍耐力などの学びに向かう力や人間性）を育てることに主眼を置いた内容としています。

その上で、目指す子ども像のために育みたい心と力を示し、就学前（5 歳児）から小学校入門期（小学校１年生１学期）の子どもの発達過程における特徴や各年齢期で大切にすべき視点や内容等を盛り込んだ「いわき市保幼小連携コアカリキュラム」と、保幼小の円滑な接続のための具体的な取組み事例をとりまとめた「保幼小連携実践事例集」で構成しました。

＜参考：幼児教育と小学校教育の違い＞

■　幼児期と児童期の学びの特徴

幼児期	児童期
学びの芽生え ● 楽しいことや好きなことに集中することを通して、様々なことを学んでいく。 ● 遊びを中心として、頭も心も動かして様々な対象と直接かかわりながら、総合的に学んでいく。 ● 日常生活の中で、様々な言葉や非言語によるコミニュケーションによって他者と関わり合う。	**自覚的な学び** ● 学ぶことについての意識があり、集中する時間とそうでない時間（休憩の時間等）の区別が付き、自分の課題の解決に向けて、計画的に学んでいく。 ● 各教科等の学習内容について授業を通して学んでいく。 ● 主に授業の中で、話したり聞いたり、読んだり書いたり、一緒に活動したりすることで他者と関わり合う。

（出展：文部科学省　スタートカリキュラムスタートブックより）

■　幼児期と児童期のカリキュラムの違い

幼児期	児童期
保育所保育指針・幼稚園教育要領 **幼保連携型認定こども園教育・保育要領** ● 「育みたい資質・能力」、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が示されている。 ● 他の子どもとの比較や一定の基準に対する達成度についての評定によって捉えるものではないことに留意する。 **方向目標**	**小学校学習指導要領** ● 「生きる力を育む」、「基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等を育む」ことを目指す。 ● 児童のよい点や進歩の状況などを積極的に評価し、学習したことの意義や価値を実感できるようにする。 ● 学習の過程や成果を評価し、指導の改善や学習意欲の向上を図り、資質・能力の育成に生かすようにする。 **到達目標**

⑷ プログラムの活用方法

本プログラムの活用方法として、保育所等においては、保育・教育課程の編成や指導計画作成の参考とするほか、日々の保育・教育の振り返りに生かすこと、また、小学校においては、1年生を中心とした教育課程の編成や、保護者理解に生かすことなどが、例として挙げられます。

そのほか、様々な場面で活用していただき、保幼小の円滑な接続のため一助となるよう、役立てていただければと考えています。

① 保育所等

- 保育課程・教育課程の編成に生かす
- 指導計画作成の参考とする
- 保育・教育の振り返りに生かす
- 日々の保育・教育改善に向けた取り組みに生かす
- 年長児クラス担任向けの研修資料に活用する

② 小学校

- 小学校1年生を中心とした教育課程の編成に生かす
  - スタートカリキュラムの参考資料
  - 入学してくる児童の姿のイメージ化並びに状態の理解のための資料
  - 小学校入門期に小学校側が引き継ぐべき内容理解のための資料
- 保護者理解に生かす
  - 子どもの成長や学びの足跡を共通理解するための視点
  - 小学校入学にあたっての不安感の軽減（10の姿→スタートカリキュラム）
- 全小学校への配布・周知を行い、保幼小の円滑な接続を推進することで、いわゆる「小1プロブレム」等の解消を図る
- 保護者や地域住民にも広く発信し、折にふれて理解を深めてもらう
- 記載内容を日案・週案の作成に反映させ、指導と評価の一体化を図る

⑸ プログラムの策定体制について

平成29年12月に本プログラム策定に係る検討組織として、保育・教育に関わる関係機関の代表から構成される「いわき市保幼小連携協議会」を設置しました。

また、協議会において審議するプログラム素案等の策定作業（調査研究及び取りまとめ）を行うため、関係部署の職員から構成される「ワーキングチーム」を設置し、これまで検討を重ねてきました。

① いわき市保幼小連携協議会

プログラム策定に係る検討組織として、保育・教育に関わる関係機関の代表から構成される「いわき市保幼小連携協議会」を設置。

【協議会構成員】計11名（任期：2年間）

学識経験者2名、私立保育所代表、私立幼稚園代表、小学校代表、公立保育所代表、公立幼稚園代表、保護者代表2名、教育部長、こどもみらい部長

② いわき市保幼小連携プログラム策定ワーキングチーム

いわき市保幼小連携協議会において審議するプログラム素案等の策定作業（調査研究及び取りまとめ）を行うにあたり、現場の意見を反映するため、保育士、幼稚園教諭、小学校教諭等の職員から構成される「ワーキングチーム」を設置。

【ワーキングチーム構成員】計13名（任期：2年間）

検討経過（付箋を活用したグループディスカッション）

保幼小連携協議会の様子

保幼小連携プログラム策定ワーキングチームの様子

＜ いわき市保幼小連携コアカリキュラムについて ＞

2 コアカリキュラムについて

「いわき市保幼小連携コアカリキュラム」は、就学前（5歳児）から小学校入門期（小学校１年生１学期）までの接続期の保育・教育活動における指導の重点やポイントをまとめたものです。

構成は、「就学前（5歳児）から小学校入門期（小学校１年生１学期）に至る接続の姿」「教師・保育者の姿勢」の二段構成としており、それぞれ区分ごとにポイントをまとめています。

(1) 就学前（5歳児）から小学校入門期（小学校１年生１学期）に至る接続の姿

「就学前（5歳児）から小学校入門期（小学校１年生１学期）に至る接続の姿」として、就学前をⅠ～Ⅳまでの期別と小学校入門前の5つの期間で区別し、「幼児の姿」と「育てたい力」に分けてまとめました。

そのうえで、「カリキュラムの4つの柱」として、①「生活」、②「遊び・学び」、③「自己」、④「人とのかかわり」を柱立てし、この柱をさらに、「興味・関心・知性・感性を育む」、「共感・関係性を育む」、「自立・自律・充実感を育む」の3つの要素・視点から区分して整理しています。

このカリキュラムを通して、「命を大切にする心・生きる力の育成」から「命に向き合う心・学びに向かう力」を育てていくという考え方としています。

「命」という言葉については、他の自治体の例では、あまり耳にするものではありませんが、東日本大震災を経験した本市にとっては、欠かすことのできないものとの認識からカリキュラムに盛り込んでいます。

(2) 教師・保育者の姿勢

「安全・安心・安定」の項目については、「安全・安心な生活を土台に、遊び、熱中し、試行錯誤し学べる毎日を作る」こと、また、「連携・支援」の項目については、「子どもを真ん中に、共に育て、共に育ち、共に育て合う」ことを、「教師・保育者の姿勢」の柱に据え、「豊かな学びの芽生えを育む」ことにつなげていくこととしています。

特徴的なものとして、「命の大切さ」を位置付けたところは、本市独自のものであり、「教師・保育者の姿勢」としても「命」を項目立てし、「一人ひとりを尊重し、愛情豊かに育てることで、自分や周りの人が大事・大好きと実感できるようにする」など、自尊感情等を育むような内容を盛り込んでいます。

いわき市保幼小連携コアカリキュラム

Ⅰ　就学前（５歳児）から小学校入門期（小学校１年生１学期）に至る接続の姿

時期	５歳児				小学校１年生(１学期)
	Ⅰ期 （出会い・かかわる・慣れる）	Ⅱ期 （のびのび・発見・感動・広がり）	Ⅲ期 （友だちと一緒・考え合う・力を合わせる）	Ⅳ期 （友だち大好き・あこがれ・期待・自信）	小学校入門期
子どもの姿	• 基本的生活習慣は身に付いているが、個人差がある。 • 進級した喜びや期待から何事も意欲的に取り組もうとする反面、新しい環境で、緊張したり、不安を感じたりする姿も見られる。	• 生活の流れがわかり、興味を持ったことに取り組むようになる。 • 集団で遊ぶ中で、それぞれの思いや考えの違いに気づき、互いに話を聞いたり意見を言ったりする。	• 気の合う友だち同士で遊びを進めていく中で、考えを出し合う姿が見られる。 • 様々な活動や行事への意欲が高まり、いろいろな挑戦をしようとする。	• 就学への期待が高まり、生活や遊びに意欲的に取り組む子どももいれば、不安を感じている子どももいる。 • 仲間意識が強まり、友だちと考えを出し合ったり、工夫したりして遊びをより楽しくしようとする。	• 入学したという期待感ややる気が高まっている一方、環境の大幅な変化に戸惑い、不安感を持つ子どもがいる。 • 幼児期までに身につけてきた友だちとの関わり方のスキルを活かして、新たな友だちと遊んだり、学んだりしようとする。

育てたい心・力

命を大切にする心・生きる力の育成 → **命に向き合う心・学びに向かう力**

Ⅰ期	Ⅱ期	Ⅲ期	Ⅳ期	小学校入門期
• 相手の思いを受け止め、保育者や友だちとの信頼関係を深め、遊びを楽しむ。	• 環境からの刺激を受けて、色々なことに興味関心を深め、互いに感じたことや考えたことを伝え合う喜びを育てる。 • 簡単なルールを作り出しながら、友だちと一緒に遊ぶ。 • 全身を使い、心を開放して遊ぶ。	• 友だちとの活動の中で、共通の目標に向かって、協力して頑張る大切さや、お互いの良さに気付く。 • 健康な生活習慣を身に付ける。	• 就学することへの期待を持ち、健康的な生活リズムを身につける。 • 今まで経験したことを活かしながら、友だちと話し合ったり協力したりして、遊びや生活を進めていく。	• 環境の変化に慣れるとともに、小学校生活への思いをふくらませ、考えを広げ、学びに夢中になる姿勢を育てる。 • これまでの経験を活かして、新たな友だちと楽しみながら関わり、好奇心を持って生活する。

３つの要素・視点

４つの柱	興味・関心・知性・感性を育む	共感・関係性を育む	自立・自律・充実感を育む
生活	• 自分の健康や体について関心を持ち、食べ物、運動、生活リズムの大切さなどに気付き、自分でできることをしようとする。 • 身の回りの出来事や生活全般について興味を持つ。	• 家族や友だちとの関わりの中で食事を楽しむ。 • 戸外で体を十分に動かし、友だちと一緒に遊びや活動を進める楽しみを味わう。	• 自分でしなければならないことを自覚して行い、あきらめずにやり遂げることで満足感や達成感を味わう。 • 健康、安全な生活に必要な習慣や態度を身に付け、見通しを持って行動する。
遊び・学び	• 豊かな経験を通じて感じたり気づいたりできる喜びや楽しさを味わう。 • 周りの友だちや自然に刺激を受けながら、生き物や身近な事象に興味・関心を持つ。	• 友だちと一緒に遊びや活動を行う中で、考えたり、工夫したりして楽しさを共有し、友だちの良さに気付いたり、認めあったりする。 • 思いきり体を動かし、友だちと相談しながら、遊びに必要なルールを考え出す。	• 物の使い方や遊び方において、工夫したり試したりし、失敗しながらも、新しいことを成し遂げ、自信を持って行動できるようになる。 • 様々な活動や遊びを十分に楽しみ、意欲的に取り組むとともに、主体的に行動することで充実感や達成感を味わう。
自己	• 自分なりに疑問に思ったことを調べたり、工夫したりしながら取り組む。	• いろいろな活動や遊びを通して、友だちや周囲の人に認められる喜びを味わう。 • 友だちや大人との関わりを通して自分の良さに気付く。 • 友だちと関わりながら、互いの思いや考えに気付き共有する中で、共通の目的に向けて、考えたり工夫したり協力したりする面白さを味わう。	• 場面や状況に応じて、自分なりに判断し、自己をコントロールしようとする。 • 自分の力で行動することや、工夫しながらあきらめずにやり遂げることで、充実感や達成感を味わう。
人とのかかわり	• 友だちが感じたこと、考えたことに興味・関心を持ち、自分が感じたこと、考えたことを様々な方法で自分なりに表現する楽しさを味わう。 • 困っている友だちに気づく。	• 様々な活動を通して人と関わる楽しさに気づき、相手の話を聴き気持ちを感じ取ったり、自分の思いを伝えたりする。 • 友だちの思いや頑張りに気付き、互いに認め合う中で相手を大切に思う気持ちを持つ。 • 友だちと一緒に遊びや活動を行う中で、楽しさを共感しあう。 • 困っている友だちに声をかけて、助けようとする。	• 集団生活を送る上でのルールや約束ごとを学び守ることで、充実感や達成感を味わう。 • 友だちの力になることで、お互いの大切さを実感する。

Ⅱ　教師・保育者の姿勢

安全・安心・安定

安全・安心な生活を土台に、遊び、熱中し、試行錯誤し学べる毎日を作る
～ 幸せな毎日の中で育て、幸せな未来へつなげる ～

一人ひとりとの関係づくり

- 一人ひとりの気持ちや考えを理解し、親しみと信頼関係を深めていく
  ↓
- 心地良い信頼関係の中で、安心して自分の思いを表せるようにする。
  ↓
- それぞれの思いや葛藤に心を寄せることで、受け入れられているという安心感が持てるようにする。
  ↓
- 一人ひとりの成長を認めることで、それぞれが満足感、達成感を味わえるようにする。

環境づくり

- 明るく清潔な環境を整え、一人ひとりが安心して過ごせるようにする。
- 季節の変化に応じた健康的な生活の場を整える。
- 職員間の連携を深め、のびのびと活動できる環境を整える。

命の大切さ

- 一人ひとりを尊重し、愛情豊かに育てることで、自分や周りの人が大事・大好きと実感できるようにする。
- 健康や安全などに関わる基本的な生活習慣や態度を身に付けることができるようにする。

連携・支援

子どもを真ん中に、共に育て、共に育ち、共に育て合う

保護者支援 ～ 保護者に寄り添い、家庭と共に ～

- 子育ての思いを共有しながら、同じ目線で語り合い、共に育てる関係性を育む。

地域との連携 ～ 地域の中で共に育つ ～

- 地域の人々と子育ての喜びを分かち合い、知恵や知識を交換し、子育て文化や子どもを大切にする価値観を共に紡ぎだす。

保幼小連携 ～ 共に伝え合い、学び合う ～

- 交流を行い相互理解を図りながら、育ちと学びの連続性を意識した保育をつなぐ。

関係機関との連携 ～ みんなで支える、支え合う ～

- 地域の専門機関、学校等と保育内容への相互理解を深め、学び合い、伝え合い、子どもの今と今につながる未来を支える関係を作る。

↓

豊かな学びの芽生えを育む

＜ 保幼小連携実践事例集 ＞

3 保幼小連携実践事例

令和2年度に、保幼小の円滑な接続に向けた具体的な取り組みを把握するため、令和2年6月に市内の全ての保育所・認定こども園・幼稚園と小学校を対象に実践事例のアンケート調査を実施しました。

調査の対象施設数、項目については、下記の表のとおりとなっており、保育所等については、円滑な小学校就学に向けて卒園までに目指している子どもの姿と、そのためにどのような視点で活動を行っているか、小学校においては、教師が抱えている「小1プロブレム」に関する悩みや不安などの具体例と、その課題を解決するために、実際にどのような取り組みを行っているかを調査しました。

また、その実践事例がコアカリキュラムの4つの柱のうち、どの柱に位置付くかを記載してもらいました。

■ 調査対象施設

全173施設

保育所：56（公立32/私立24）、認定こども園：16（私立16）、幼稚園：36（公立14/私立22）

小学校：65（公立64/私立1）

■ 調査項目

保育所・こども園・幼稚園（108施設）	小学校（65校）
(1) 園児数 (2) スムーズな小学校就学に向けて、目指している子どもの姿 (3) 保幼小連携に向けた取り組み （活動名、内容、ねらい、指導上のポイント、その他） (4) 自由記載 （小学校先生へ伝えたいこと、日頃感じていることなど）	(1) 児童数・クラス数 (2) 小1プロブレムの有無・具体的な事例 (3) 小1プロブレムの課題解決に向けた取り組み （活動名、内容、ねらい、指導上のポイント、その他） (4) 自由記載 （その他の取り組み、日頃感じていることなど）

調査の結果、保育所等は80施設から128事例、小学校は61校から88事例の回答が得られました。

また、小学校のうち、小1プロブレムが発生していると感じていると回答した割合は、半数以上の39校ありました。

これらの実践事例の中から、回答数が多かったものや特徴のあるものを実践事例集としてまとめました。

■ 実践事例

区分	回答施設数	事例数	コアカリキュラムの４つの柱			
			生活	遊び・学び	自己	人との関わり
保育所・こども園・幼稚園	80	128	68	84	53	84
小学校	61	88	41	41	43	71

■ 卒園までに目指している姿（主なもの）

・基本的な生活習慣が身に付いている。
・食事・排泄・着脱衣を自分でできるようになる。
・困ったことも含めて、自分の言葉で友達や身近な大人に伝えられるようになる。
・友達と協力して、活動や遊びに取り組むことができる。
・友達と関わり、社会のルールを守って生活できるようになる。
・様々な事に挑戦する意欲を持っている。
・人の話しを集中して聞く態度や姿勢が身に付いている。
・人と協力することや他者への思いやりの気持ちが備っている。
・自分の気持ちを自分の言葉で伝えることができる。
・困難に直面しても、諦めずに取り組むことができる。
・元気に挨拶ができる。
・文字や数、図形に興味・関心を持っている。
・いろいろな遊びを楽しみながら、根気強く取り組み、やり遂げた時の充実感を味わう。

■ 小1プロブレムの具体例（主なもの）

・ 暴力的な行動や、乱暴な言葉をつかう。
・ 自分の思い通りにならないと、泣き叫んだり、物にあたる。
・ 教師の話を聞いていないため、指示通りに動けない。
・ 授業中、姿勢がすぐ崩れたり、立ち歩いて、教室から出て行ったりする。
・ 友達の気持ちを理解するのが苦手である。
・ 善悪の判断ができず、友達を傷つける言動をする。
・ 自己中心的である。
・ やりたくないことはやらない。
・ 保護者と離れることへの不安を訴える。
・ 生活リズムが一定せず、夜更かし、寝坊、居眠り等がある。
・ 着替えや片づけなどを自分一人ではなかなかできず、大人（教師）の手助けを待っている。
・ 教科書やノートの準備、片付け等ができないため、時間通りに授業を開始できない。
・ 学習用具を忘れたり、紛失したりすることが多い。
・ 一人で行動することが多く、集団の輪に入ろうとしない。

(1) 保育所・こども園・幼稚園の実践事例

～身近な自然環境からの学び～

① 散歩に行こう …… 16

② 野菜を育てよう …… 17

③ 川の魚・海の魚を作ろう …… 18

④ 自然体験活動を通して …… 19

～感性を育むために～

⑤ 絵本に親しむ …… 20

～できる・できた体験を積み重ねながら～

⑥ 折り紙・ブロック遊びをしよう …… 21

⑦ 「夏祭り」に向けて話し合いをしよう …… 22

⑧ みんなで「逆上がり」を練習しよう …… 23

～生活を整える力を身につけるために～

⑨ 天候に合わせて着替えをしよう …… 24

⑩ 身の周りのことを自分でしよう …… 25

⑪ スケジュールを理解し、主体的に行動しよう …… 26

～入学への期待を高めていくために～

⑫ 小学校との交流活動 …… 27

⑬ 小学校の給食を食べよう …… 28

<項目の説明>

活動名・活動内容・・・それぞれの園で、実際に行っている活動とその内容

活動のねらい・・・活動を通して目指している子どもの姿

指導上のポイント・・・工夫している点や留意点など

その他・・・補足事項など

コアカリキュラムの4つの柱・・・コアカリキュラムが示す「4つの柱」とのつながり

～身近な自然環境からの学び～

保幼小連携実践事例

【活動名】

① 散歩に行こう

〈活動内容〉

保育所等の周辺を散歩する。

活動のねらい	指導上のポイント	その他
✧ 小学校入学後の通学に向けて、交通ルールを守り、最後まで自分で歩く体力をつける。 ✧ 様々な自然に触れることで、自らの発見や思いを自分の言葉で伝えたり、探求心をもったりする。 	✧ 安全に留意しながら、危険な場所等は全体に声掛けをし、共通理解を図る。 ✧ 上手に歩けたり、交通ルールを守っている姿を認め、時には励ましたりする。 ✧ 子どもたちの様々な発見に耳を傾け、共感したり保育所等に持ち帰り観察したり、図鑑で調べたりする。	✧ 目標をもって散歩に出かけることで、子どもたちが達成感を味わえるようにしている。

コアカリキュラムの４つの柱			
生　活	遊び・学び	自　己	人とのかかわり
○	○	―	○

～身近な自然環境からの学び～

保幼小連携実践事例

【活動名】

② 野菜を育てよう

〈活動内容〉

野菜（ピーマン、ミニトマト、オクラ、ナスなど）を育てるため畑づくり、苗植え、水やり、収穫、クッキングを行う。

活動のねらい	指導上のポイント	その他
✧ 水やりを行いながら、野菜の生長に関心を持つ。 ✧ 食べ物の大切さに気付く。 ✧ 収穫の喜びと関わった方へ感謝の気持ちを持つ。 ✧ 友達と協力し、役割分担をする。 	✧ 野菜の花や葉の数、色の変化などに気が付き、意識できるような機会をつくる。 ✧ ジョーロやバケツなど必要な道具の準備から片づけを自分たちで行えるよう促す。 ✧ 収穫するときは、みんなで喜びを分かち合うようにする。	✧ 野菜がうまく実らないことも経験し、自然の営みや不思議さとして理解できるようにする。

コアカリキュラムの４つの柱			
生　活	遊び・学び	自　己	人とのかかわり
○	○	○	○

～身近な自然環境からの学び～

保幼小連携実践事例

【活動名】

③ 川の魚・海の魚を作ろう

〈活動内容〉

実際に魚屋に行き、いろいろな魚を見たり、図鑑で調べて海と川の魚を区別し、魚のかたちをつくり、魚釣りごっこを行う。

活動のねらい	指導上のポイント	その他
✧ 自分たちの作りたいものの見学を行ったり、図鑑を見たりして調べる。 ✧ 製作活動に必要なものを話し合い、自分たちで材料を集める。 ✧ 製作をしていくうえで、どうしたらうまくいくかイメージを膨らませ友達と話し合う。 ✧ 山から海までをいろいろな素材を使い環境設定する。	✧ 子どもたちの意見を大切にし、イメージに近づくよう援助していく。 ✧ 意見の食い違いがある場合は、時間をかけたり、設計図を描いたりしてイメージが共有できるようにする。 ✧ 活動する中で、友達の思いや頑張りに気付き、相手を大切に思う気持ちがもてるように配慮する。 	✧ 友達の思いや頑張りを保育者が言葉にして、皆に伝えることで違うグループの子とも思いを共有させる。

コアカリキュラムの４つの柱			
生　活	遊び・学び	自　己	人とのかかわり
―	○	―	○

保幼小連携実践事例

【活動名】

④ 自然体験活動を通して

〈活動内容〉

散歩をしながら、自然の植物や小動物とふれあったり、地域の方々とのコミュニケーションを図る。
また、木の枝や葉っぱなどを遊びのなかに取り入れ、幅広い遊びを行う。

活動のねらい	指導上のポイント	その他
✧ 動植物の世話や観察をしながら、成長を楽しみ、命の大切さを知る。 ✧ 危ない場所や行動を学び、歩くことで体力づくりにつなげる。 	✧ 子ども自身の自主的な行動を認め、発見や気付きに共感したり、疑問を一緒に考えたり調べたりしながら、知ることの楽しさが味わえるようにする。 ✧ 木の枝や葉っぱなどを使って、友達と創造力をふくらませながら、遊びを展開していけるようにする。	✧ 植物のとげや、小動物の特性を知り、安全に触れることができるようにする。 ✧ 散歩する際は、通学路を歩くようにし、その道や地域の方に親しみを持てるようにする。

コアカリキュラムの４つの柱			
生　活	遊び・学び	自　己	人とのかかわり
○	○	―	○

保幼小連携実践事例

【活動名】

⑤ 絵本に親しむ

〈活動内容〉

集中しやすい朝の時間に、クラスの本棚から選んだ絵本を自分の席に座って、見たり読んだりする。

活動のねらい	指導上のポイント	その他
✧ 一定時間、同じ活動に集中して参加できるようになる。 ✧ 絵本を通して、文字や数字、物語に親しみをもつ。 ✧ 自分で読むことを強制せず、絵本に親しむことをねらいとする。 	✧ 季節ごとに絵本を変えて、手に取りやすい配置にする。 ✧ 0 歳向け～児童書など幅を持たせた絵本を用意する。 ✧ 図鑑や写真、移動図書館の本も取り入れる。 ✧ 当番制で絵本の音読を行う。	✧ 子どもたちの様子に合わせて、絵本の整理や他児の感想・本の紹介などやり取りまで広く展開していく。

コアカリキュラムの４つの柱			
生　活	遊び・学び	自　己	人とのかかわり
―	○	―	―

保幼小連携 実践事例

【活動名】

⑥ 折り紙・ブロック遊びをしよう

〈活動内容〉

折り紙で季節の生き物や植物を製作したり、ブロック等を使って、イメージしたものを形にすることや、保育者が作った見本と同じかたちを作る。

活動のねらい	指導上のポイント	その他
✧ 季節に関心を持ち、感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。 ✧ 見ることに集中し、同じ形を作るにはどうすればよいか考える力を身につける。 	✧ 絵本や図鑑を見たり、戸外遊びや散歩の中で実際に見たり触れたりしながら、季節の自然を感じられるよう声かけしたり、子どもの気付きや発見に共感しながら、季節の生き物や事象に興味が持てるようにしている。 ✧ 表現を工夫しながら進める姿やそれぞれの表現を友達と認め合い取りいれたり、新たな表現を考えたりする姿を十分に認め意欲につながるようにしている。	✧ 見本と同じ形にできあがらなくても頑張った過程を褒め、認めてあげる。 ✧ 取り組みが苦手な子には、保育者と一緒に取り組みながら楽しめるようにする。

コアカリキュラムの４つの柱			
生　活	遊び・学び	自　己	人とのかかわり
―	○	○	○

保幼小連携 実践事例

【活動名】

⑦「夏祭り」に向けて話し合いをしよう

〈活動内容〉

毎年７月に実施する夏祭りの内容（屋台の種類や、担当する人等）について、児童同士で話し合いを行いながら、実施に向けて計画を立てていく。

活動のねらい	指導上のポイント	その他
✧ 年長児が主となり、子どもたちで案を考え、夏祭りが楽しいものになるよう話し合いを行う。 ✧ 友達の意見をよく聞いて、友達と一緒にイメージを広げていく。 	✧ 自分たちで考えて発表する姿を認め、「なるほど」「面白そうだね」等、意見を尊重しながら自信のもてる言葉掛けをする。 ✧ なかなか決まらない時には保育者がいくつか提案を出して、イメージがしやすいよう配慮を行う。	✧ 年長児が中心となる夏まつりである為、責任感をもって話し合いに取り組む姿が見られる。 ✧ 自分の経験体験したことを思い出しながら提案してくれる子もいる。

コアカリキュラムの４つの柱			
生　活	遊び・学び	自　己	人とのかかわり
○	―	―	○

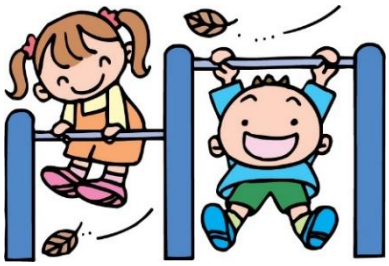
保幼小連携 実践事例

【活動名】

⑧ みんなで「逆上がり」を練習しよう

〈活動内容〉

「逆上がり」をできるようになるという共通目標を設定し、クラス全員で練習に取り組み、児童同士で励まし合いながら、練習をする。

活動のねらい	指導上のポイント	その他
✧ できなかったことができるようになる喜びを味わい、様々な活動に自信を持って取り組めるようになる。 ✧ 運動能力の向上 ✧ クラスみんなで、励まし合い、仲間意識を育てる。 	✧ 苦手意識を持つ子どもには、頑張る姿を認めたり、一緒に応援することで、挑戦する気持ちを持たせる。 ✧ 個人個人に合った目標を立て、達成感を味わいながら練習できるようにする。	✧ 他の子と比較して、できないことに劣等感を抱くのではなく、頑張る過程に価値を見出せるように一人一人の努力を認める。

コアカリキュラムの４つの柱			
生　活	遊び・学び	自　己	人とのかかわり
―	○	○	○

保幼小連携実践事例

【活動名】

⑨ 天候に合わせて着替えをしよう

〈活動内容〉

外遊びに行く前後に、自分で暑さ・寒さを考え、衣服の調節を行い、汗をかいたらタオルで拭いて、着替えを行う。
また、喉が渇いた時には、自分で自由に水分補給を行う。

活動のねらい	指導上のポイント	その他
✧ 天候に合わせた衣服の調整をしようとする。 ✧ 汗の始末の仕方を知り、自ら行う。 ✧ 自分で水分補給するなど、自分で体調管理をしようとする。 	✧ 「今日のお天気はどうかな？」など声かけをし、天候や気温を意識して衣服を考えられるようにする。 ✧ 活動の具合や気温を考慮して、みんなに水分補給を呼びかけ、いつでも水分補給できるよう、ジャグ（麦茶）を手の届く所に設置する。 ✧ 喉がかわいたら、いつでも麦茶を飲んでよいと共通認識をしている。	✧ 指示待ちではなく、自分で考えて行動できる力を身につける。

コアカリキュラムの４つの柱			
生　活	遊び・学び	自　己	人とのかかわり
○	―	―	―

保幼小連携実践事例

【活動名】

⑩ 身の周りのことを自分でしよう

〈活動内容〉

トイレでの始末の仕方、衣類の着脱・畳み方、自分の持ち物の管理・片付け、時間内(30 分)の食事・箸の使い方・後片付けをできるようにする。

活動のねらい	指導上のポイント	その他
✧ 自分でやらなければならないことをしっかり身につけ、健康的で清潔に生活できる。 ✧ 自主的に動き、見通しをもって生活できる。 	✧ トイレの使い方を丁寧に伝え、できていることを確認する。 ✧ 時計を見ながら、食べるスピードや食事中の会話を調整をしていけるように気付かせていく。 ✧ 時間や次への活動の見通しがもてるような言葉がけ（「次は〇〇をやるよ」など）をする。 ✧ できないことを SOS の言葉で伝えられるようにする。	✧ 洋式・和式のどちらともに対応できるようにする。 ✧ 学年ごとにできることを増やし、安心して入学できるようにする。

コアカリキュラムの４つの柱			
生　活	遊び・学び	自　己	人とのかかわり
○	―	―	―

保幼小連携実践事例

【活動名】
⑪ スケジュールを理解し、主体的に行動しよう

〈活動内容〉

毎日のスケジュール（時間割のようなもの）を視覚的に提示し、朝の会で見せながら説明をするとともに、子ども達が見たい時には情報を確認できるようにする。

活動のねらい	指導上のポイント	その他
✧ いつ、どこで、どのくらい、どんなふうに、いつ終わって、次は何？という情報を子どもたちが自分自身で確認し行動できる。 ✧ わからない情報を自ら担任の先生に聞くことができる。 ✧ 見通しをもって、安心して１日を過ごすことができる。	✧ 活動ごとの手順についても、視覚的に伝えるようにしている。 ✧ 「どのくらい」という情報についてはタイマーも積極的に使用している。 ✧ その子にとって必要な情報をその子の発達状況・特性に合わせて伝える。 	✧ できたこと・できている事については、たくさん褒める様にしている。

コアカリキュラムの４つの柱			
生　活	遊び・学び	自　己	人とのかかわり
○	―	―	―

保幼小連携実践事例

【活動名】

⑫ 小学校との交流活動

〈活動内容〉

年長児と小学生との交流活動を行う。（ランドセル体験、授業体験、大休憩の班活動や自由遊びなど）

活動のねらい	指導上のポイント	その他
✧ １年生の授業を体験することで、小学校生活への期待を膨らませるとともに学ぶことを楽しむ。 ✧ 小学生と一緒に共通の目的に向かって活動することで、集団でのルールを学ぶとともに、ダイナミックに遊ぶ楽しさを味わう。 	✧ 自分の席で主体的に授業に臨めるよう、事前に小学校担任と年長組担任が連絡を取り合う。 ✧ 自由遊びは、孤立してしまわないように、支援の必要な園児に寄り添う。	✧ 特別な支援が必要な子どももいるため、子に応じた配慮・支援・手立てを園内で検討し、小学校と連絡を取り合って活動内容も準備する必要がある。

コアカリキュラムの４つの柱			
生　活	遊び・学び	自　己	人とのかかわり
○	○	―	○

保幼小連携実践事例

【活動名】

⑬ 小学校の給食を食べよう

〈活動内容〉

近くの小学校を訪問し、給食の試食を通して、食器の触感や給食の量、小学生がおいしそうに食べる雰囲気を感じ、配膳から片付けの仕方を学ぶ。

活動のねらい	指導上のポイント	その他
✧ 一年生と一緒に給食を食べたりすることで、安心感を得ながら、入学に向けての期待を高める ✧ 学校給食の準備から片づけまでの取り組みを体験し、自分でもできるという自信を育てる。 	✧ 偏食の子に対し、無理しないよう言葉をかけ、残菜の処理のやり方を手伝う。食物アレルギーのある子へは、特別に配慮し、学校給食担当者と連絡を取り合う。 ✧ 事前に、保育所等職員が小学校の準備・後片付けの方法を学び、給食の時間内に終了できるようにする。 ✧ 児童が分からないことがあったら、一年生や先生に聞けるよう、困っている状況を自ら伝えられるよう援助する。	✧ 体験型で色々な体験ができたことで、安心感や期待感につながった。 ✧ 不安を抱いている園児にとって、この時期の学校見学と給食試食会は不安解消に効果的であった。

コアカリキュラムの４つの柱			
生　活	遊び・学び	自　己	人とのかかわり
○	○	○	○

⑵ 小学校の実践事例

～人とのかかわり～

① どきどきわくわく１年生 ･････････････････････････････････････ 30

② 縦割り班活動 ･･･ 31

～安全･安心･安定～

③ 朝のスピーチ ･･･ 32

④ キラキラスピーチ ･･･ 33

～環境づくり～

⑤ 朝の時間 ･･･ 34

⑥ 一行日記 ･･･ 35

⑦ 授業前のミニゲーム ･･ 36

～命の大切さ～

⑧ 毎日チャレンジ大作戦 ･････････････････････････････････････ 37

⑨ 生き物を飼ってみよう ･････････････････････････････････････ 38

～連携･支援～

⑩ 新一年生を招待しよう ･････････････････････････････････････ 39

⑪ 「いわきっ子入学支援シート」を活用した教育相談 ･･････････････ 40

＜項目の説明＞
活動名･活動内容･･･それぞれの小学校で、実際に行っている活動とその内容
活動のねらい･･･活動を通して目指している子どもの姿
指導上のポイント･･･工夫している点や留意点など
その他･･･補足事項など
コアカリキュラムの4つの柱･･･コアカリキュラムが示す「4つの柱」とのつながり

保幼小連携実践事例

【活動名】

① どきどきわくわく１年生

〈活動内容〉

教室や体育館のなかで、自由に歩きまわりながら、出会った友達と自己紹介を交互に行い、それを繰り返すことで、いろんな友達の名前とサイン集めを行う。

活動のねらい	指導上のポイント	その他
✧ 自分から友達に声をかけることが苦手な児童もいるため、じゃんけんゲームから自己紹介や名前を書く活動につなげることで、新しい友達を知る機会をつくる。 	✧ 音楽に合わせて移動し、曲が止まった時に出会った友達とじゃんけん、勝った方から自己紹介、互いの名前をカードに書き合うという流れで進めることで、自分から友達に声をかけられない児童が活動しやすいようにする。	✧ この活動で新しい友達を知る機会ができたので、そこからもっと仲良くなれるよう、友達と関わるゲームを１年かけて段階的に増やしていく。

コアカリキュラムの４つの柱			
生　活	遊び・学び	自　己	人とのかかわり
―	―	―	○

保幼小連携実践事例

【活動名】

② 縦割り班活動

〈活動内容〉

異学年（１～6 年生）の班を編成し、仲良しタイム（ゲームや遊びの時間）、遠足の活動計画の話し合いやなど、上級生が下級生の世話をしながら、共同で様々な活動を行う。

活動のねらい	指導上のポイント	その他
✧ 上級生を信頼し、児童間の信頼関係を築き上げ、交流を深めていく中で、人への思いやりなどの心情を養う。 ✧ 友達や上級生の考えを聞いたうえで、自分の考えを自分の言葉で伝えようとする。	✧ 上級生の聞く様子や発表する姿を手本とするように意識付けをする。 ✧ 話し合いでは、必ず一度は自分の考えを発表する場を設定する。 	✧ 発表が苦手な児童へ強要はしないこと。 ✧ 下級生が、自分たちが上級生になったときに、こういった世話がしたいという憧れを持つと、次につながっていく。

コアカリキュラムの４つの柱			
生　活	遊び・学び	自　己	人とのかかわり
○	○	―	○

保幼小連携実践事例

【活動名】

③ 朝のスピーチ

〈活動内容〉

朝の会のなかで、児童が「昨日の出来事」や「好きなこと」などについて、１分間程度のスピーチを行い、聞いている児童には、質問や感想を述べる時間をつくり、児童同士で言葉のキャッチボールを行う。

活動のねらい	指導上のポイント	その他
✧ 自分の考えを言葉で伝えられるようにする。 ✧ 人の話を最後まで聞く。 ✧ 友達の良いところを認めたり、達成感を味わったりできる。 	✧ スピーチは日直が行い、２週間に１回程度、順番が回るようにする。 ✧ 話をしっかりと聞くことができるよう、質問タイムを設定する。 ✧ 丁寧な言葉づかいを心掛ける。	✧ 児童達のコミュニケーション能力を高めることが、様々なトラブルの防止につながることを期待している。

コアカリキュラムの４つの柱			
生　活	遊び・学び	自　己	人とのかかわり
―	―	○	○

保幼小連携実践事例

【活動名】

④ キラキラスピーチ

〈活動内容〉

国語の授業や帰りの会のなかで、「今日一日のなかで、友達の輝いていたところ」「友達の発表の仕方の良いところ」などをスピーチする機会をつくる。

活動のねらい	指導上のポイント	その他
✧ 学校生活の中で、何かできたときに認められたり、達成感を味わったりする。 ✧ 広くまわりに目を向けられるようにする。 ✧ 友達を意識しながら、文字や言葉で伝えようとする。	✧ 話す話型を示して、児童がまねしやすいものにすることで、自信をもってスピーチできるようにする。 ✧ 身近な友達のことを話すことで、興味を持たせ最後までしっかり聞こうとする態度を持たせる。	✧ 友達に褒められて嬉しいと感じたことを、保護者の方に伝えやすいように、帰りの会にスピーチの時間を設ける。

コアカリキュラムの４つの柱			
生　活	遊び・学び	自　己	人とのかかわり
○	―	○	○

～環境づくり～

保幼小連携実践事例

【活動名】

⑤ 朝の時間

〈活動内容〉

一日の予定を、黒板に絵カードで見える化し、児童が、これから何をするのか、先を見通して行動できるようにする。

活動のねらい	指導上のポイント	その他
✧ 自分の活動に見通しをもって臨めるようにする。 ✧ 自ら考えながら行動しようとする。 	✧ 絵カードの指示は短い言葉で書き、スモールステップで無理なく活動できるようにする。 ✧ 「1 つずつクリアする」ことで「できた」という達成感を持てるようにし、次への意欲を持てるようにする。	✧ 困ったり行動にうつせない子に行動にうつせるような言葉をかけ、「できた」につなげていく。

コアカリキュラムの４つの柱			
生　活	遊び・学び	自　己	人とのかかわり
○	―	○	―

保幼小連携実践事例

【活動名】

⑥ 一行日記

〈活動内容〉

毎日、二文程度の日記（学校で楽しかったこと、頑張ったことなど）を、児童に連絡帳に書く時間をつくり、家で保護者に読んでもらう。

活動のねらい	指導上のポイント	その他
✧ 学校生活の振り返りができる。 ✧ 保護者と子どものコミュニケーションの機会づくりを図る。 	✧ 入学当初は文字の指導は行わず、楽しかったことや頑張ったことなどを感じたまま書かせることを大切にする。 ✧ 機会を捉え、特徴的な内容や上手な表現等をクラス全体に紹介し、良いところはマネしやすいようにする。	✧ 学年だより等を通して、保護者に対し日記の内容を家庭内で話題にしてもらうように伝えておく。

コアカリキュラムの４つの柱			
生　活	遊び・学び	自　己	人とのかかわり
―	―	―	○

保幼小連携実践事例

【活動名】

⑦ 授業前のミニゲーム

〈活動内容〉

休み時間からの授業への切替え時や授業中において、児童の集中力が続かなくなったときに、体をつかうゲームや、声を出したりして行うゲームを取り入れ、気分転換を図りながら、授業を行う。

活動のねらい	指導上のポイント	その他
✧ 教師とのミニゲームを通して、教師の話に意識をしっかり向けることができるようにする。 ✧ 友だちとのミニゲームを通して、他者との関わりを学ぶことができるようにする。	✧ 国語の授業では、動きを取り入れたゲームやしりとり、言葉づくりを行っている。 ✧ 算数の授業では、カードの提示の仕方や、数の合成の唱え歌などを行っている。 ✧ 1 つの教科だけでなく、生活と算数など複数の教科を関連づけた合科的な指導を行い、児童の興味関心を引き出す。	✧ ゲームから授業に戻りたくないような児童も排除することなく、その気持ちを汲み取り言葉をかけつつ、切り替えていく。

コアカリキュラムの４つの柱			
生　活	遊び・学び	自　己	人とのかかわり
―	○	―	○

保幼小連携実践事例

【活動名】

⑧ 毎日チャレンジ大作戦

〈活動内容〉

各児童が、一日ひとつの小さなチャレンジ（「友達にあいさつする」「トイレの使い方を覚える」など）を設定し、クリアを目指して活動する。

活動のねらい	指導上のポイント	その他
✧ 目標をもって生活し、学校生活を楽しみながら、ルールを覚えたり、人と関わったりする子どもを育てる。	✧ チャレンジの内容を達成しやすいものにすることで、達成感を味わうことができるようにする。 ✧ 内容は、学校生活の習慣づけや友達との関わり合いに関するものにする。	✧ 毎日の課題が難しそうであれば、週一、月一と柔軟な対応をとる。

コアカリキュラムの４つの柱			
生　活	遊び・学び	自　己	人とのかかわり
○	○	―	○

保幼小連携実践事例

【活動名】

⑨ 生き物を飼ってみよう

〈活動内容〉

小学一年生の児童が興味を持ちやすい生物（カタツムリ、オタマジャクシ、メダカ、トンボ、アオムシなど）を学級で飼育する。

活動のねらい	指導上のポイント	その他
✧ 学級で飼育する生物を軸にして生まれる、子ども同士、教師と子どもの関わりから、互いの興味関心を広げていく。	✧ 変化に気づいた児童に、よく観察していることを称賛する。 ✧ 「お世話したい」「触ってみたい」「エサをあげたい」「絵に描きたい」「名前をつけたい」などと自発的な行動を、できる限りに応えられるようにする。 ✧ 昆虫の命を大切にしようとする発言や姿を大切にする。	✧ 生物が苦手な児童には、無理させず、観察させるなど、その児童の思いも大切にする。

コアカリキュラムの４つの柱			
生　活	遊び・学び	自　己	人とのかかわり
―	―	―	○

保幼小連携実践事例

【活動名】

⑩ 新一年生を招待しよう

〈活動内容〉

次年度に新入生となる保育所等の年長児を小学校へ招待し、鉛筆の持ち方から、各教科の授業内容・給食体験・学校探険などを通して、小学校の様子を伝える。

活動のねらい	指導上のポイント	その他
✧ 上級生になるという意識付けをするとともに、自分よりも年下の友達に対し、親切な対応を心がけるよう育成する。 ✧ 一年前の自分と比べて、「こんなに成長したんだ」という自身の成長を自覚する。 	✧ 児童主体の活動にするため、自分が年長時に経験したこと等を振り返らせ、年長児が喜んでくれる内容を考えさせる。 ✧ 事前に「もうすぐ２年生になる」「新しい１年生が入学してくる」などの言葉かけをすることで、上級生になることを意識づける。 ✧ 役割分担やリハーサルを実施する。	✧ 一年生担任教師は、保育所等の年長児担任と事前に打ち合わせを行い、互いに無理のないように進める。 ✧ 教師は、活動の出来栄えよりも児童と園児との関わりを重視し、関わりを温かく見守るよう努める。

コアカリキュラムの４つの柱			
生　活	遊び・学び	自　己	人とのかかわり
○	○	○	○

保幼小連携実践事例

【活動名】

⑪ 「いわきっ子入学支援シート」を活用した教育相談

〈活動内容〉

小学校入学前に全保護者に対し「いわきっ子入学支援シート」を配付し、子どもの不安な点や保育所等での対応などについて記入し・提出してもらう。

また、必要に応じて「入学支援会議」や「教育相談」を行いながら、入学後の指導方法や指導内容について保護者と共通理解を図る。

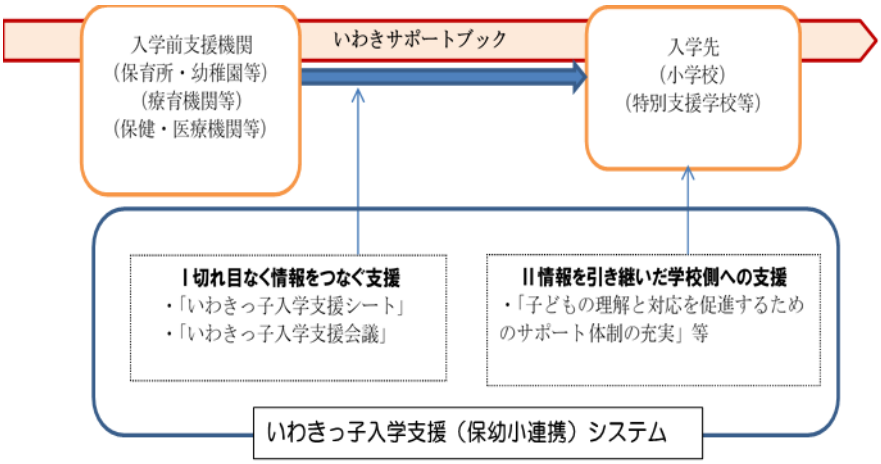
活動のねらい	指導上のポイント	その他
✧ 保育所・幼稚園等と小学校の連携を深め、児童がより良い学校生活を送ることができるようにする。 	✧ 児童のマイナス面にだけ着目するのではなく、それを解消するために有効だった手立てなどの情報交換を行う。	✧ 入学支援シートは、児童の就学先の決定に使うのではなく、入学後の児童への対応、保護者との面談、保育所・幼稚園等との引継ぎなどに活用する。必要に応じ、入学支援会議、教育相談等で活用する。

コアカリキュラムの４つの柱			
生　活	遊び・学び	自　己	人とのかかわり
○	―	―	○

いわきっ子入学支援（保幼小連携）システムについて

本市では、発達面で何らかの配慮が必要なお子さんに対して、「 いわきっ子入学支援（保幼小連携）システム」の運用により、幼児期から学童期へライフステージを移行しても、切れ目なく情報をつなぎ、一貫性を持った配慮・支援を行います。

このシステムは、①家庭や保育園等、療育機関等で行ってきたお子さんへの配慮・支援の情報を小学校等に引き継ぐ「いわきっ子入学支援シート」「いわきっ子入学支援会議」と、②情報を引き継いだ学校側を支援する「子どもの理解と対応を促進するためのサポートプログラム」の2つから構成されています。



いわきっ子入学支援シート	✧ 「入学支援シート」は、入学前のお子さんの成長・発達の歩みや、支援・配慮等の工夫を、保護者と保育所・幼稚園、療育機関等が一緒にまとめ、入学する学校に伝えるためのシート。 ✧ 入学前に行われてきた支援・配慮の情報を、切れ目なくつなぐことで、入学後の学校生活をよりよいものにすることを目的とする。 ✧ 入学前や入学後の早い段階から、お子さんの具体的な支援や配慮の内容を話し合うことで、支援体制づくりを図ることができる。 ✧ シート名の内容は、「個別の支援計画」や小学校入学後の「個別の教育支援計画」「個別指導計画」に連動。 ✧ 対象者は、小学校入学を迎えるお子さんの保護者全員が配布対象、そのうち、保護者が希望する場合に入学先に提出する。
いわきっ子入学支援会議	✧ 入学支援シートの内容等をもとに、入学先だけでなく、保護者や関係機関等も参加し、お子さんへの支援・配慮を検討する必要性がある場合に開催する（参集は学校が決定）。 ✧ 入学前のお子さんの様子や支援・配慮の内容等を、入学先に引き継ぎ、必要な支援を提供する。
情報を引き継いだ学校への支援	✧ 入学前の支援・配慮の情報を受け取った学校側が、支援力を高め、児童にとって必要な支援を充実させていくことを目的に、「子どもの理解と対応を促進するためのサポート体制の充実」に取り組む。

⑶ 教師・保育者同士のつながり

教師・保育者同士の相互理解を深めるため、小学校の教師と保育所等の保育者が、相互に保育体験や授業参観をしたり、合同研修会を行っています。保幼小連携を推進する上での基盤となり、幼児教育と小学校教育のそれぞれの充実につながっていきます。

保幼小連携実践事例

① 小中学校教諭等の社会体験研修

〈内容〉

いわき市総合教育センターでは、採用 10 年を経過した小・中学校の教諭等を対象に実施する経験者研修Ⅱ（中堅教諭等資質向上研修）において、社会人としての視野を広げることを目的とし、２日間の社会体験研修を実施しています。

希望により市内保育所において体験研修を実施した研修者もおり、保育体験や保育士との懇談を通して小学校との円滑な接続に向けて視野を広げる機会となっています。

保幼小連携実践事例

② 幼稚園教諭の参観研修

〈内容〉

いわき市総合教育センターでは、幼稚園新規採用教員研修の園外研修の一つとして、幼稚園以外の教育施設の参観研修を実施しています。

小学校での参観研修では、研修者が参観や懇談の機会を通して、小学校における子どもの発達段階や教師の関わりについての理解を深め、視野を広げることで、幼稚園での指導に還元できる機会となっています。

保育所や他の幼稚園での参観研修も行っており、発達段階を同じくする施設の横の連携の機会にもなっています。

保幼小連携実践事例

③ 保幼小連携講座

〈内容〉

いわき市総合教育センターでは、市内の保育士、幼稚園教諭、小学校教諭の希望者を対象に、専門研修の教育課題改善講座の一つとして保幼小連携講座を開設しています。

保幼小の円滑な接続や保幼小連携のあり方について、効果的な実践事例の発表や円滑な連携についての協議を通して、相互理解を深める機会となっています。

保幼小連携
実践事例

④ 一日保育体験事業

〈内容〉

小学校教諭が保育実践を体験することによって、就学前の幼児の様子や発達過程を理解し、互いの教育内容や指導方法の違いを前提に、それぞれの施設の役割を再認識することで、円滑な接続に向けた指導方法等の改善ができるよう、相互理解を深めることを目的としています。

平成 28 年度に田人保育所をモデル事業として実施し、平成 29 年度から全公立保育所を対象として実施しています。

実習までの流れ	一日の流れ	
① 実施小学校・参加教諭の決定	9：00～	クラス説明・施設案内
② 実習受け入れ保育所の選定・調整	9：30～	保育実習
③ 小学校へ依頼・実施要領の送付	10：00～	設定保育
④ 打ち合わせ・日程調整	11：30～	給食
・当日の主な活動（プール遊び、泥んこ遊びなど具体的に）を伝え、身支度や準備物について助言する。	13：00～	午睡
	13：30～	意見交換会 （午前中の保育実習の振り返りや、小学校入学後の児童の様子の共有を行う）
・当日のデイリープログラムを晴雨別に作成し、事前に送付する。		
・保育所の年齢別の活動内容を知ってもらうために、「○月指導計画案」を年齢毎に用意する。	14：45～	保育実習
	16：00～	実習のまとめ （後日、保育所・小学校・こども支援課において、感想等を共有し、相互理解を図る）

〈実習の様子〉

＜実習を受けて感じたこと（小学校教諭）＞

- 次年度入学してくる子どもたちの様子を見ることができて大変良かった。
- 所長先生や現1年生を担任していた先生と情報共有することができ、改めて保育所と小学校の連係が重要であると感じた。
- 学校での生活の様子を伝えることができた。また、保育園ではどのような対応をしていたかを教えてもらったので、今後の児童の支援に役立てていきたい。
- 保育所が子どもたち一人ひとりの良さを大切にして育てていることは、小学校に入学してからもずっと繋がっていることであり、子どもたちと関わる上でも大切にしていかなければならないと感じた。
- 年長児クラスということもあり、自分のことは自分でする様子や、掃除や片付けを積極的にする姿が印象的だった。
- 小学校入学後には、良さを伸ばすような指導・支援ができると良いと感じた。
- 小学校で教員が指導に苦労している部分は、保育をする先生方も意識して指導しているということを知れた。だからこそ、小学校においても繰り返しの継続した指導の必要性を感じた。
- 児童たちが早く学校に慣れ、安心して過ごすことができるよう小さなことでもお互いが情報を交換して連携して行くことが大切であると感じた。

＜実習を受け入れて感じたこと（保育所の先生）＞

- 小学校へ入学し、まず苦労するのが和式便器での排泄と知り、保育所でも練習が必要であると感じた。
- 子どもたちが、小学校の先生と関わったり、サポートしてもらったりしたことは良い経験だった。就学への不安が少なくなり、期待がより高まったように感じる。
- 環境が変わっても保育所ならでは経験の積み重ねが小学校にも繋がることを改めて感じた。
- 小学校の授業見学等の機会があればよいと思う。
- 小学校での段差を小さくすることは、就学前の子どもの生活の様子を理解し、保育所や幼稚園での育ちを確実に引き継ぐような工夫をしていただくことで、より滑らかな接続に繋がるものと考える。
- 意見交換の中で、今後の就学までの見通しや個々への働きかけの工夫等、貴重なお話をいただけた。
- 子どもたちが、小学校の給食の話など、ストレートに聞いて、答えていただける貴重な時間だったと思う。
- 日頃から連携をとれるような体制づくりはとても大切である。

＜ 参考 資料 ＞

1 これまでの検討経過について

■いわき市保幼小連携協議会・プログラム策定ワーキングチームの開催経過

開催日時	会議名・議題
H29.12.27	H29年度第1回保幼小連携協議会 ・会議の運営等について ・いわき市保幼小連携プログラムの策定について ・関連事業について
H30.1.24	H29年度第1回保幼小連携プログラム策定ワーキングチーム ・保幼小連携プログラムについて ・コアカリキュラムの作成について
H30.1.30	H29年度第2回保幼小連携プログラム策定ワーキングチーム ・保幼小連携プログラムの作成について ・保幼小連携の現状について ・保幼小連携にかかる調査について
H30.2.14	H29年度第2回保幼小連携協議会 ・保幼小連携プログラムについて ・本市における保幼小連携の現状について ・保幼小連携に係る調査の実施について
H30.3.19	市内の保育所、認定こども園、幼稚園、小学校に対して調査を実施
H30.8.24	H30年度第1回保幼小連携プログラム策定ワーキングチーム ・保幼小連携コアカリキュラムの柱について
H30.8.30	H30年度第2回保幼小連携プログラム策定ワーキングチーム ・保幼小連携コアカリキュラムの柱及び柱ごとのねらいについて
H30.10.29	H30年度第1回保幼小連携協議会 ・いわき市保幼小連携プログラムの策定に係る協議経過及び今後の予定について ・保幼小連携にかかる調査結果について ・保幼小連携コアカリキュラムの柱等について
H31.1.18	H30年度第3回保幼小連携プログラム策定ワーキングチーム ・保幼小連携コアカリキュラムの全体案について ・保幼小連携コアカリキュラムの活用方法について

開催日時	会議名・議題
H31.2.12	H30年度第2回保幼小連携協議会 ・保幼小連携コアカリキュラム案について
R 元.7.4	R 元年度第1回保幼小連携協議会 ・会議の運営について ・いわき市保幼小連携プログラムについて ・保幼小連携に係る事例収集について
R2.6.5	市内の保育所、認定こども園、幼稚園、小学校に対して実践事例の調査を実施
R2.8.12	R2年度第1回保幼小連携プログラム策定ワーキングチーム ・保幼小連携実践事例に係る調査について
R2.12.16	R2年度第1回保幼小連携協議会 ・保幼小連携実践事例集(案)について
R3.2.25	R2年度第2回保幼小連携協議会 ・いわき市保幼小連携プログラム(案)について

■いわき市保幼小連携協議会委員

□平成29年度

氏名	団体・所属等
齋藤 政子	明星大学教育学部教育学科 教授
鈴木 美枝子	いわき短期大学幼児教育科 教授
宮内 隆光	福島県保育協議会いわき支部
新妻 英昭	いわき市私立幼稚園協会
後藤 幸一	いわき市立平第四小学校
上野 由美子	保護者代表
吉村 昭一郎	保護者代表
安島 久恵	いわき市立白土保育所
髙萩 有子	いわき市立すずかけ幼稚園
柳沼 広美	いわき市教育委員会事務局
本田 和弘	いわき市こどもみらい部

□平成30年度

氏名	団体・所属等
齋藤 政子	明星大学教育学部教育学科 教授
鈴木 美枝子	いわき短期大学幼児教育科 教授
宮内 隆光	福島県保育協議会いわき支部
新妻 英昭	いわき市私立幼稚園協会
後藤 幸一	いわき市立平第四小学校
上野 由美子	保護者代表
吉村 昭一郎	保護者代表
安島 久恵	いわき市立白土保育所
髙萩 有子	いわき市立すずかけ幼稚園
柳沼 広美	いわき市教育委員会事務局
高萩 文克	いわき市こどもみらい部

□令和元年度

氏名	団体・所属等
齋藤 政子	明星大学教育学部教育学科 教授
鈴木 美枝子	いわき短期大学幼児教育科 教授
宮内 隆光	福島県保育協議会いわき支部
吉田 元	いわき市私立幼稚園協会
後藤 幸一	いわき市立平第二小学校
森藤 真奈美	保護者代表
井田 夏子	保護者代表
大平 恵美子	いわき市立白土保育所
髙萩 有子	いわき市立すずかけ幼稚園
高田 悟	いわき市教育委員会事務局
高萩 文克	いわき市こどもみらい部

□令和2年度

氏名	団体・所属等
齋藤 政子	明星大学教育学部教育学科
鈴木 美枝子	いわき短期大学幼児教育科
宮内 隆光	福島県保育協議会いわき支部
吉田 元	いわき市私立幼稚園協会
猪狩 照良	いわき市立平第三小学校
鈴木 繁治	保護者代表
金成 美江	保護者代表
大平 恵美子	いわき市立白土保育所
阿部 葉子	いわき市立すずかけ幼稚園
高田 悟	いわき市教育委員会事務局
高萩 文克	いわき市こどもみらい部

■いわき市保幼小連携プログラム策定ワーキングチーム

□平成29年度

氏名	団体・所属等
鈴木 郁美	中央台保育園
渡邊 美紀	小島保育園
髙萩 恵美	平幼稚園
長沢 睦	さかえ幼稚園
大森 淳	教育委員会事務局 学校教育課
松﨑 伯文	教育委員会事務局 総合教育センター教育支援室
林 裕一	教育委員会事務局 総合教育センター研修調査室
志賀 大祐	こども支援課
中村 寛	こども支援課
雨澤 裕美	こども支援課
川﨑 裕絵	いわき市立高坂保育所
阿部 葉子	こども支援課
千田 歩	いわき市立すずかけ幼稚園

□平成30年度

氏名	団体・所属等
鈴木 郁美	中央台保育園
渡邊 美紀	小島保育園
髙萩 恵美	平幼稚園
長沢 睦	さかえ幼稚園
大森 淳	教育委員会事務局 学校教育課
渡邉 信貴	教育委員会事務局 総合教育センター教育支援室
黒津 牧花	教育委員会事務局 総合教育センター研修調査室
小島 誠一	こども支援課
中村 寛	こども支援課
雨澤 裕美	こども支援課
川﨑 裕絵	いわき市立高坂保育所
阿部 葉子	こども支援課
千田 歩	いわき市立すずかけ幼稚園

□令和元年度

※開催なし

□令和2年度

氏名	団体・所属等
鈴木 郁美	中央台保育園
渡邊 美紀	小島保育園
髙萩 恵美	平幼稚園
上村 伯恵	さかえ幼稚園
数間 浩行	教育委員会事務局 学校教育課
鈴木 陽文	教育委員会事務局 総合教育センター研修調査室
泉 翔子	教育委員会事務局 総合教育センター教育支援室
中村 寛	こども支援課
鈴木 厚志	こども支援課
西野 あや	こども支援課
松本 あゆみ	いわき市立本町保育所
千田 歩	こども支援課
大平 綾子	いわき市立四倉第二幼稚園

2 保幼小連携に係る調査結果について

保幼小連携に係る調査結果について

1 調査の趣旨

いわき市保幼小連携プログラムを策定するにあたって、本市の保育所・認定こども園・幼稚園と小学校との連携・接続に関する現状と課題を把握する。

2 調査の概要

（1） 調査対象

市内全ての保育所、認定こども園、幼稚園、小学校：175施設

＜内訳＞

① 保育所56園（内訳：私立25園、 公立31園）

② 認定こども園4園（内訳：私立4園）

③ 幼稚園47園（内訳：私立33園、公立14園）

④ 小学校68校（内訳：私立1校、公立67校）

（2） 調査実施時期

平成30年3月

3 回収率　96.0%（168/175）

＜内訳＞

① 保育所　94.6%（53/56）

② 認定こども園　100.0%（4/4）

③ 幼稚園　91.5%（43/47）

④ 小学校　100.0%（68/68）

○ 調査結果

1. 保育目標・教育目標について（調査対象：全施設）

【 主な文言等 －抜粋－ 】
＜保育所（園）、幼稚園、認定こども園＞
○ 子どもが現在を最も良く生き、豊かな人間性と望ましい未来を作り出す力を育てる。
○ 子どもが保護者との安定した関係を保てるように保護者の支援にあたる。
○ 自分の気持ちと体を大切にする子ども
○ 友だちを大切にする子ども
○ 自分で考え行動する子ども
○ 豊かに感じ表現する子ども
○ 人の気持ちに気付き寄り添う子ども
○ 思いやりのある子
○ 明るく素直な子
○ 自分のことは自分でする子
○ 基本的生活習慣を身に付ける
○ 物事を最後までやり抜く子ども
○ 集団生活の中でともに楽しみ、自己を発揮できる子どもを育てる。
○ 元気な子ども
○ みんなと仲良く過ごせる子ども
○ 約束を守る

＜小学校＞
○ 思いやりのある子ども
○ よく考える子ども
○ たくましい子ども
○ 進んで学ぶ子ども
○ 健康な子ども
○ ねばり強く学習する子ども
○ がんばる子ども
○ よく働く子ども
○ みんなと仲良く、助け合える子ども

2. 子どもの成長・育ちにおいて近年特に大事にしていること（調査対象：全施設）（自由記述）

【 主な回答（要旨） －抜粋－ 】
＜保育所（園）、幼稚園、認定こども園＞
○ 子どもの成長の喜びを保護者と共有する。保護者が喜びを感じながら子育てできるように支えていくこと。保護者支援。
○ 一人一人の個性を大切にする。
○ 体作り
○ 自分で考え、自分で行動すること。
○ 様々な体験を通して、豊かな感性や思考力、創造性を育てること。
○ 自己肯定感の形成
○ 協調性
○ 命を大切にする。
○ 基本的生活習慣を身に付ける。

＜小学校＞
○ 基本的な生活習慣を身に付ける。
○ 思いやりの心
○ 自分で気づき、考え、行動する子ども
○ 根気強く最後までやり抜く子ども
○ コミュニケーション能力
○ 命の大切さ
○ あいさつ
○ 自己肯定感を高める。
○ 表現力

3.（1）保幼小連携の意義のうち重視しているもの（調査対象：保育所、幼稚園、認定こども園）

保幼小連携の意義のうち重視しているものとして、保育所、幼稚園、認定こども園では、「幼児期にふさわしい生活を通して幼児自身が創造的な思考や主体的な生活態度の基礎を培うようにすること」や「小学校教育の学習の基盤となるよう幼児期の生活や遊びを充実させること」をあげたところが多かった。

※　下記の選択肢に順位をつけて回答

選択肢		件数及び各順位に占める割合											
		1位		2位		3位		4位		5位		6位	
		件数	割合	件数	割合	件数	割合	件数	割合	件数	割合	件数	割合
(ア)	小学校教育の学習の基盤となるよう幼児期の生活や遊びを充実させること	24	23.5%	45	47.9%	13	13.8%	7	7.6%	6	7.1%	0	0.0%
(イ)	幼児期にふさわしい生活を通して幼児自身が創造的な思考や主体的な生活態度の基礎を培うようにすること	60	58.8%	24	25.5%	7	7.4%	2	2.2%	1	1.2%	0	0.0%
(ウ)	就学が、幼児にとって憧れや喜びが感じられるものとなるよう配慮すること	15	14.7%	10	10.6%	46	48.9%	16	17.4%	8	9.4%	0	0.0%
(エ)	幼児期の教育と小学校教育が円滑に接続するカリキュラムを工夫すること	0	0.0%	11	11.7%	19	20.2%	37	40.2%	24	28.2%	0	0.0%
(オ)	幼児と児童の交流、職員同士の交流に取り組むこと	1	1.0%	4	4.3%	9	9.6%	30	32.6%	46	54.1%	1	50.0%
(カ)	その他	2	2.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	50.0%
計		102	100%	94	100%	94	100%	92	100%	85	100%	2	100%

3.（2）保幼小連携の意義のうち重視しているもの（調査対象：小学校）

保幼小連携の意義のうち重視しているものとして、小学校では、「就学が、幼児にとって憧れや喜びが感じられるものとなるよう配慮すること」や「発達のつながりを意識し、幼児期から児童期への発達の段階に対する認識を深めること」をあげたところが多かった。

※　下記の選択肢に順位をつけて回答

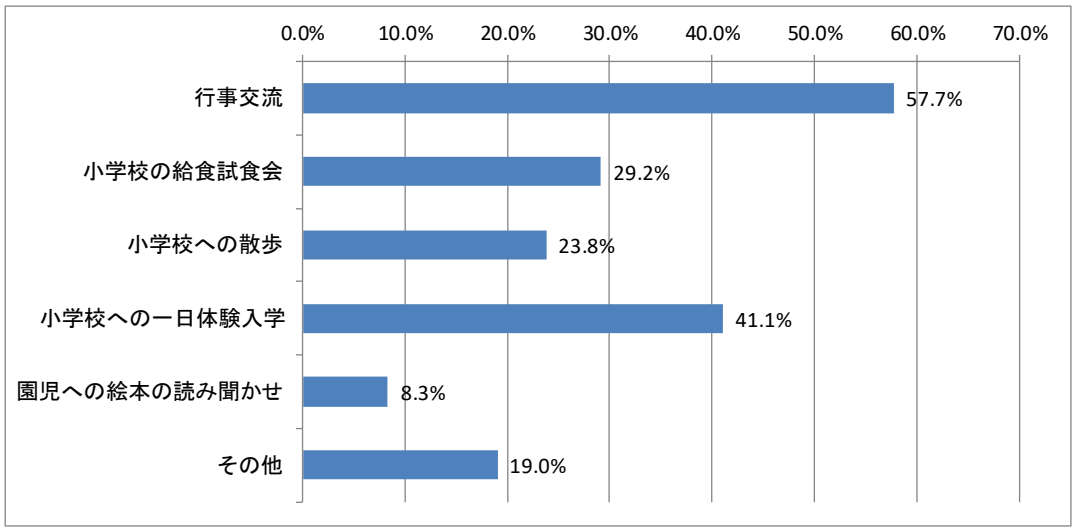
選択肢		順位及び件数											
		1位		2位		3位		4位		5位		6位	
		件数	割合	件数	割合	件数	割合	件数	割合	件数	割合	件数	割合
(ア)	入学後の自分の姿を幼児に見てもらうことで自己肯定感が育つようにすること	8	11.9%	9	13.4%	13	19.4%	16	24.2%	20	30.3%	0	0.0%
(イ)	発達のつながりを意識し、幼児期から児童期への発達の段階に対する認識を深めること	16	23.9%	13	19.4%	17	25.4%	12	18.2%	9	13.6%	0	0.0%
(ウ)	就学が、幼児にとって憧れや喜びが感じられるものとなるよう配慮すること	17	25.4%	19	28.4%	12	17.9%	11	16.7%	8	12.1%	0	0.0%
(エ)	幼児期の教育と小学校教育が円滑に接続するカリキュラムを工夫すること	13	19.4%	16	23.9%	13	19.4%	16	24.2%	8	12.1%	0	0.0%
(オ)	保幼小連携を進めるため、幼児と児童の交流、職員同士の交流に取り組むこと	13	19.4%	10	14.9%	12	17.9%	11	16.7%	21	31.8%	0	0.0%
(カ)	その他	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	100.0%
計		67	100%	67	100%	67	100%	66	100%	66	100%	1	100%

4.　幼児教育と小学校教育の接続において取り組んでいること（調査対象：全施設）

（1）子ども同士の交流について、実施している活動（複数回答）

子ども同士の交流について、実施している活動としては、「行事交流」（57.7%）が最も多く、「小学校への一日体験入学」（41.1%）、「小学校の給食試食会」（29.2%）と続いている。

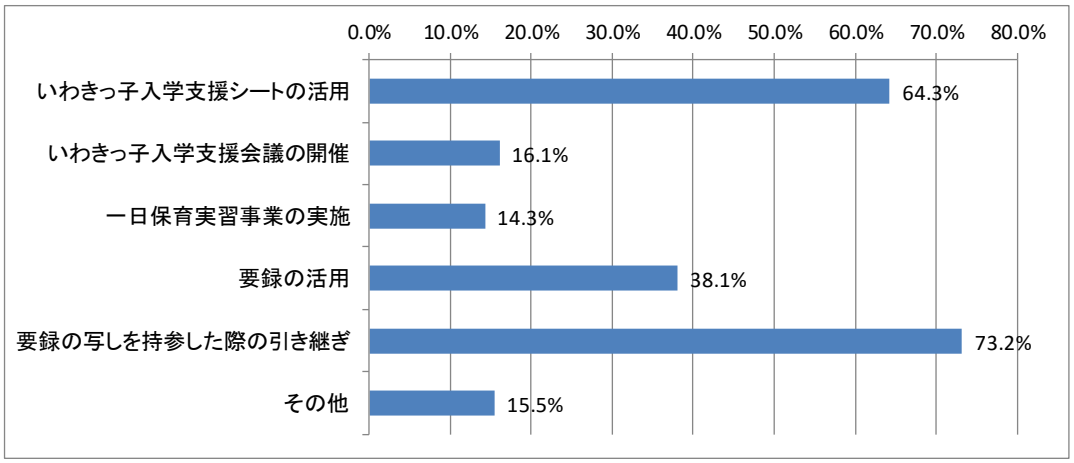
選択肢	選択件数	割合
(ア)　行事交流	97	57.7%
(イ)　小学校の給食試食会	49	29.2%
(ウ)　小学校への散歩	40	23.8%
(エ)　小学校への一日体験入学	69	41.1%
(オ)　園児への絵本の読み聞かせ	14	8.3%
(カ)　その他	32	19.0%



（2）教職員同士の交流について、実施している活動（複数回答）

教職員同士の交流について、実施している活動としては、「要録の写しを持参した際の引き継ぎ」（73.2%）が最も多く、「いわきっ子入学支援シートの活用」（64.3%）、「要録の活用」（38.1%）と続いている。

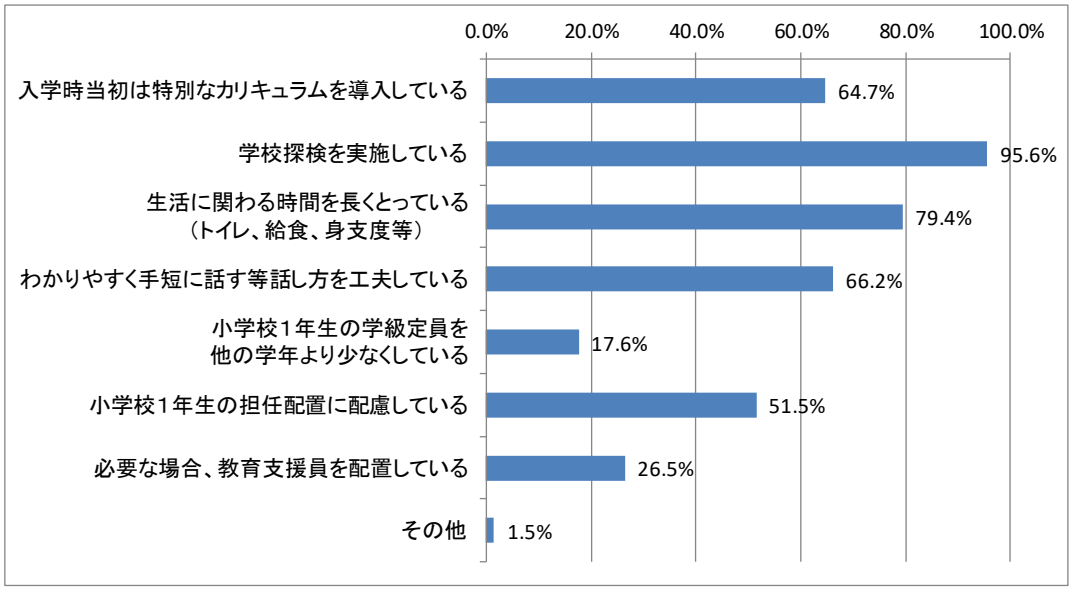
選択肢	選択件数	割合
(ア)　いわきっ子入学支援シートの活用	108	64.3%
(イ)　いわきっ子入学支援会議の開催	27	16.1%
(ウ)　一日保育実習事業の実施	24	14.3%
(エ)　要録の活用	64	38.1%
(オ)　要録の写しを持参した際の引き継ぎ	123	73.2%
(カ)　その他	26	15.5%



5.　小学校1年生前半において教育上配慮していること（調査対象：小学校）（複数回答）

小学校1年生前半において小学校で配慮していることとしては、「学校探検を実施している」（95.6%）が最も多く、「生活に関わる時間を長くとっている（トイレ、給食、身支度等）」（79.4%）、「わかりやすく手短に話す等話し方を工夫している」（66.2%）と続いている。

選択肢	選択件数	割合
(ア)　入学時当初は特別なカリキュラムを導入している	44	64.7%
(イ)　学校探検を実施している	65	95.6%
(ウ)　生活に関わる時間を長くとっている（トイレ、給食、身支度等）	54	79.4%
(エ)　わかりやすく手短に話す等話し方を工夫している	45	66.2%
(オ)　小学校1年生の学級定員を他の学年より少なくしている	12	17.6%
(カ)　小学校1年生の担任配置に配慮している	35	51.5%
(キ)　必要な場合、教育支援員を配置している	18	26.5%
(ク)　その他	1	1.5%



6.　入学にあたって小学校に期待すること（調査対象：保育所、幼稚園、認定こども園）（自由記述）

【　主な回答（要旨）　-抜粋-　】
○　入学支援シートや保育所保育要録の有効活用
○　小学校側からできていてほしいことを伝えていただければ、保育所側でも配慮したい。（小学校との連携が大切）
○　子どもたちの保育所での様子を知った状態で受け入れてほしい。
○　子ども一人一人の心身の発達に合った、個人差に十分配慮した教育

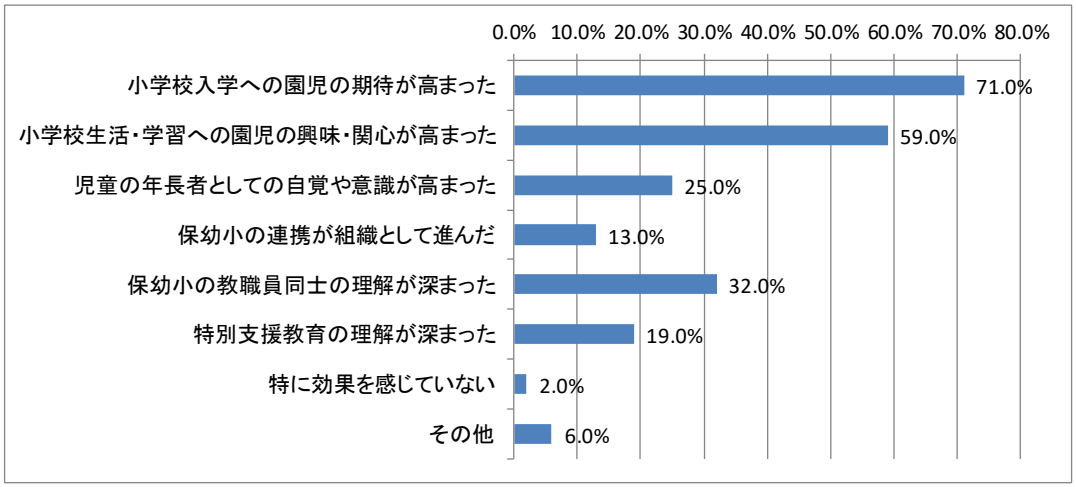
7.　入学にあたり最低限できていてほしいこと（調査対象：小学校）（自由記述）

【 主な回答（要旨） －抜粋－ 】
○　自分で着替えができる。
○　自分の名前が読める。
○　トイレが自分でできる。
○　困ったこと（トイレ、具合が悪いなど）を言葉で伝えることができる。
○　話が聞ける。
○　あいさつ、返事ができる。

8.　保幼小連携を実施してよかったこと（調査対象：保育所、幼稚園、認定こども園）（複数回答）

保幼小連携を実施してよかったこととして、保育所、幼稚園、認定こども園では、「小学校入学への園児の期待が高まった」（71.0%）が最も多く、「小学校生活・学習への園児の興味・関心が高まった」（59.0%）、「保幼小の教職員同士の理解が深まった」（32.0%）と続いている。

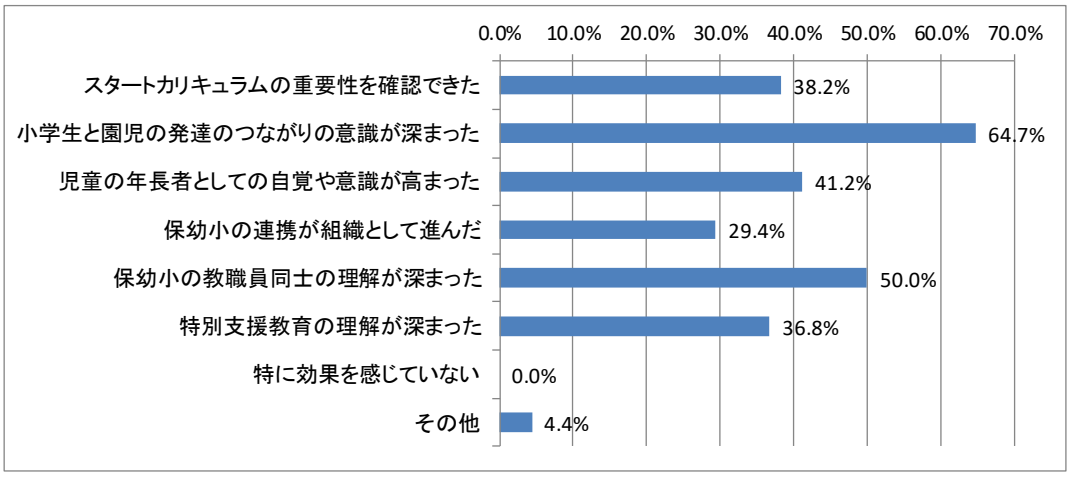
選択肢	選択件数	割合
(ア)　小学校入学への園児の期待が高まった	71	71.0%
(イ)　小学校生活・学習への園児の興味・関心が高まった	59	59.0%
(ウ)　児童の年長者としての自覚や意識が高まった	25	25.0%
(エ)　保幼小の連携が組織として進んだ	13	13.0%
(オ)　保幼小の教職員同士の理解が深まった	32	32.0%
(カ)　特別支援教育の理解が深まった	19	19.0%
(キ)　特に効果を感じていない	2	2.0%
(ク)　その他	6	6.0%



9.　保幼小連携を実施してよかったこと（調査対象：小学校）（複数回答）

保幼小連携を実施してよかったこととして、小学校では、「小学生と園児の発達のつながりの意識が深まった」（64.7%）が最も多く、「保幼小の教職員同士の理解が深まった」（50.0%）、「児童の年長者としての自覚や意識が高まった」（41.2%）と続いている。

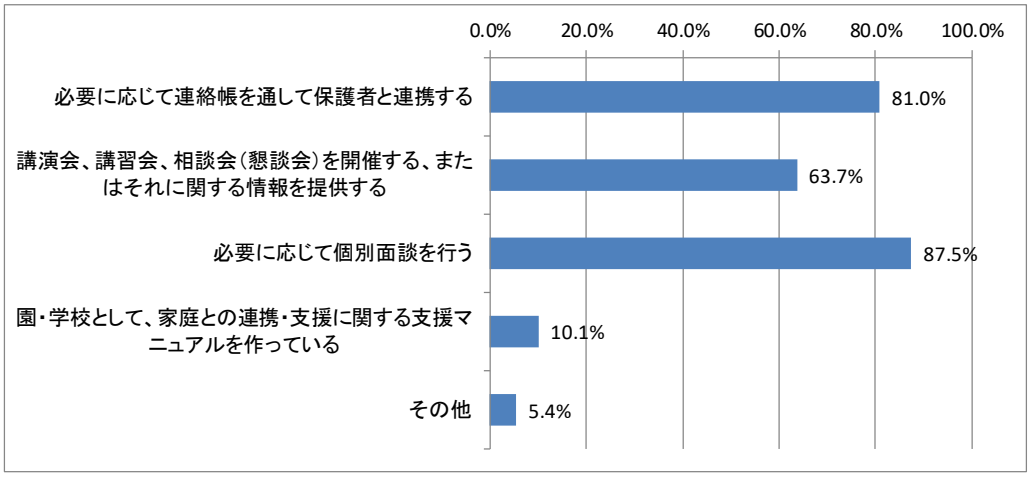
選択肢	選択件数	割合
(ア)　スタートカリキュラムの重要性を確認できた	26	38.2%
(イ)　小学生と園児の発達のつながりの意識が深まった	44	64.7%
(ウ)　児童の年長者としての自覚や意識が高まった	28	41.2%
(エ)　保幼小の連携が組織として進んだ	20	29.4%
(オ)　保幼小の教職員同士の理解が深まった	34	50.0%
(カ)　特別支援教育の理解が深まった	25	36.8%
(キ)　特に効果を感じていない	0	0.0%
(ク)　その他	3	4.4%



10.　家庭との連携について取り組んでいること（調査対象：全施設）（複数回答）

家庭との連携について取り組んでいることとしては、「必要に応じて個別面談を行う」（87.5%）が最も多く、「必要に応じて連絡帳を通して保護者と連携する」（81.0%）、「講演会、講習会、相談会（懇談会）を開催する、またはそれに関する情報を提供する」（63.7%）と続いている。

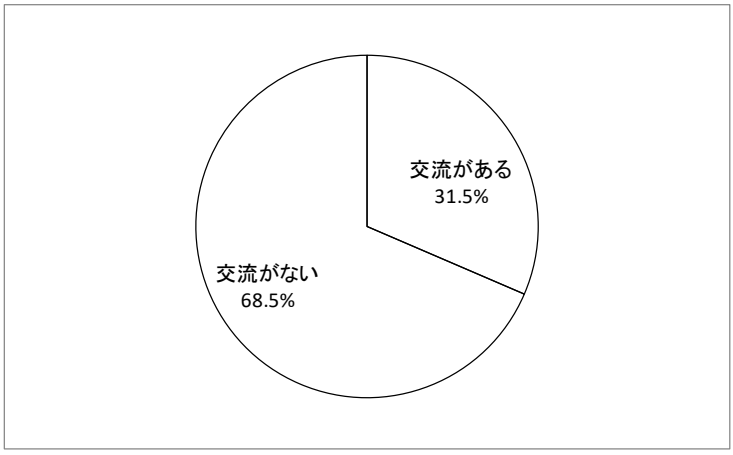
選択肢	選択件数	割合
(ア)　必要に応じて連絡帳を通して保護者と連携する	136	81.0%
(イ)　講演会、講習会、相談会（懇談会）を開催する、またはそれに関する情報を提供する	107	63.7%
(ウ)　必要に応じて個別面談を行う	147	87.5%
(エ)　園・学校として、家庭との連携・支援に関する支援マニュアルを作っている	17	10.1%
(オ)　その他	9	5.4%



11.　他の就学前施設との交流の有無（調査対象：保育所、幼稚園、認定こども園）

保育所、幼稚園、認定こども園においては、68.5%が他の就学前施設と交流がないと回答した。

選択肢	選択件数	割合
交流がある	28	31.5%
交流がない	61	68.5%

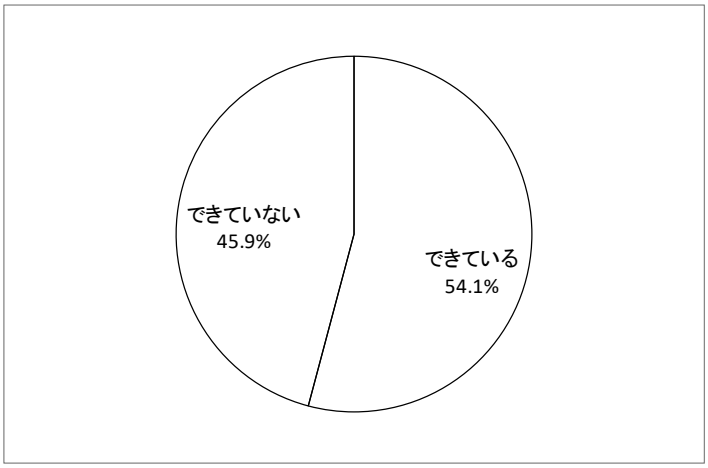


12.　望ましい保幼小連携ができていると思うか（調査対象：全施設）

望ましい保幼小連携ができていると回答した施設の割合は54.1％で、できていないと回答した割合を上回っている。

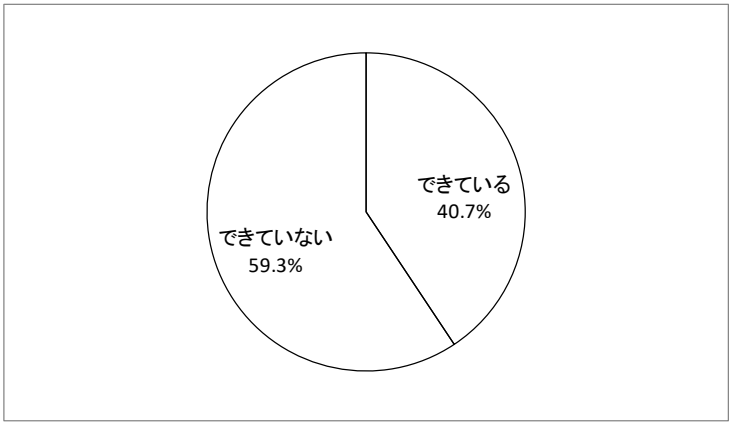
【全施設】

選択肢	選択件数	割合
できている	85	54.1%
できていない	72	45.9%



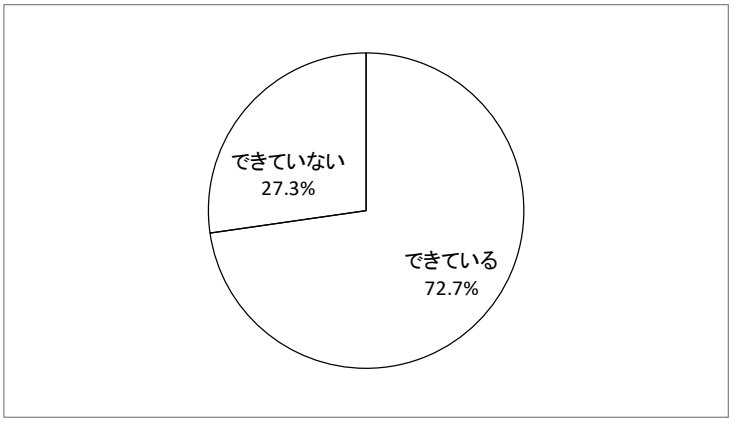
【保育所、幼稚園、認定こども園】

選択肢	選択件数	割合
できている	37	40.7%
できていない	54	59.3%



【小学校】

選択肢	選択件数	割合
できている	48	72.7%
できていない	18	27.3%



13.　保幼小連携について感じていること・考えていること（調査対象：全施設）（自由記述）

【 主な回答（要旨） －抜粋－ 】
＜保育所（園）、幼稚園、認定こども園＞
○　地域によって連携に差がある。
○　小学校側で入学支援シートや保育要録を有効活用してもらいたい。
○　学校からくる行事日程が、保育園側としてはちょっと忙しい時期となっている。
○　保育所でやっていることを小学校の先生に知って欲しいし、保育所側も小学校でやっていることを知りたい。保育士が小学校で一日見学あるいは実習の機会があってもいいと思う。小学校へ送り出した子が、小学校を卒業する頃にはどのように成長したか興味がある。一年生だけの交流だけでなく、他の学年との交流もあっていいと思う。
○　人員不足により、日常保育、園行事のほかに連携活動までできない状況。
○　幼稚園職員ばかりでなく、小学校職員にも園に訪問し園児の生活している様子をみてもらいたい。
○　小学校だけでなく保育所と幼稚園の交流なども検討していく必要があると思う。
○　入学への不安を軽減するために小学校訪問を複数回儲けたいが、なかなかスケジュールが噛み合わない。
○　小学校側の希望を知りたい。
○　進学する小学校に呼んでいただきオリエンテーションを兼ねて行事を半日ほど持っていただくのは、良い取組だと思う。降園に合わせて午後に設定していただいているのも、各幼稚園の行事への支障が少なくありがたい。
○　小学校進学に向けての情報交換にあたって、直接出向くところや電話で済ませるところもあり、各幼稚園と各小学校との間で共通のルールがあるといいと思う。
○　各々の団体だけでの研修会は行っているようだが、全ての幼保小が集まりお互いの情報を交換する機会が少ないので、お互いの教育内容理解まで出来ていないように感じる。そういった場が増えることを望む。
○　幼小の連携は大切だと思うが、実際に交流の機会を設定するとなると、双方ともそれぞれのカリキュラムでめいっぱいなので、時間の確保が難しいと思う。
○　学習面に関しては、より具体的な目安を提示していただけると、家庭とも連携しながら取り組めると思う。

○　小学校へのあこがれを持ち入学することが一番の入口だと思う。
　①幼児、児童の交流については、幼保小の年間計画への位置付け、目標の明確化が必要であり、交流のための相互のカリキュラム作りなどが必要と思われる。
　②小学校教師、幼稚園教師、保育士の交流についてはコーディネーターや研究者をオブザーバーに加え子どもの発達の連続性をふまえた連携方策の構築や評価が必要と思われる。
　①②については各園での取り組みがなかなか難しいが、小学校への円滑な接続のための教育課程の編成、指導方法、指導内容について各園で幼児期に育てたい力をしっかりと育てられるよう努力し、小学校以上の学びにつながるよう、又、つながっているか示せるよう努力したい。
○　幼稚園では、年齢に応じた育ちのあり方を大切にしたい。
○　要録提出の際の引き継ぎについて、時期や手段、方法が各小学校でまちまちである。もう少し統一性をもつべきではないかと思う。

＜小学校＞
○　連携は、大切だと思うが、連携を始めたことで会議や行事が多くなり、それぞれの学校のキャパシティを超えるような連携になっては、長続きしないのでは。（小学校や保育･幼稚園等は子どものためならばと無理をしても始めてしまいがちなので）
○　お互いの活動を理解し、共有していく内容の確認をしていくことにより、連携も深まっていくと思う。
○　本校へ入学する園児は複数の保育園・幼稚園からの入学のため、連携を行う際の連絡調整が難しい。
○　幼保小連携は大変重要なこととは認識しているが、保育園や幼稚園と時間を調整しながら話し合う場をつくることが難しい。
○　行事だけでなく、日常の交流が大切であると感じている。
○　小学校入学にあたり、困り感のある子どもの情報を保幼から聞くことは、新１年生の学級を編成する上で重要である。
○　幼児教育と小学校教育の「育てたい資質・能力」の共有化をはかっていくことが重要である。
○　保幼小連携は子どもたちのスムーズな学校生活を送るためには、とても大切なことである。しかし、小中連携も見据えていかなければならいし、保幼小連携も考慮していかなければならないことを考えると、今現在、できることを継続していくことが大切であり、上乗せして連携していくと時間が非常に足りないという問題が生じてくる。
　保幼小連携を考えることは、その業務に対する時間の確保をすることが大切であり、現在の業務や人員から考えると無理が生じてくることが予想される。
○　連携事業により、１年生は年下の子どもに対して、優しく接しようとする思いやりの心が育つと考えている。

○　実際に保育園・幼稚園に行くことで、児童が好きな物や得意なことが分かる。児童のいいところを知り、伸ばすためにも、積極的に園に訪問したり、園と面談したりするとよいと考えている。
○　小学校入学時点での子どもの育ちは、家庭での育ちは当然だが、育った園・所によって、大きな差を感じる。
○　各園・所の特色（英語や運動等）よりも、幼児期に必要なものを優先してほしいと感じる。